
一人の少年の物語

G T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人の少年の物語

【Nコード】

N1814Q

【作者名】

GT

【あらすじ】

ある一つの言葉の持つ意味を、それが何であるのかを探し、行動する一人の少年のお話

第1話

はじまりはじまりを告げる記憶

緑に囲まれた静観な景色の中に、ひっそりと存在する小さな小さな家々の建つ少し開けたその場所に、動く影は幾つも無い。

空を飛ぶ鳥達の影は木々にさえぎられ、生い茂る草を踏み分ける獣も其処には近づくことも稀で、ならば其処に人影が見受けられるかといえば、小さな影が一つ動くだけ。

数ある家々には生活を営む気配は無く、景色に溶け込むようにひっそりと佇むだけで、それ以上にその存在感を主張することもなく、ただそこに在るだけの存在となっていた。

そんな光景が続いてどれ位の日数がたったのである。ふとその人影が思案顔でそれについて考えるように動きを止めると、不意に上向けた視線に眩しい光が差し込み、眼を細めながらゆるく首を振るとその考えを中断する。

小さな籠を背負い、手に小さな水瓶を持つと、うんつと軽く伸び上がるような動きをした後、ゆっくりと息を吐き出した後、誰がいなくてもない家を振り返った後、小さく「行つてきます」とつぶやいて、歩きなれた獣道然としたそこへ足を踏み入れ、歩き始めた。

木の実を背負った籠に入れ、沢で汲んだ水を手に持つ瓶に、やはり考えるのはこれからどうすればいいのだろうかという、何時もと同じもの。

少なかった知り合いも、一人、又一人と居なくなり、気がつくとその処には自分しか残って居なかった。

ここを出ればどうなっているのかということも考えないでもないが、しかし出た所で生きていける自信もやはり起こらず。このままここで暮らすには何とかなるだろうとは思うものの、このまま何も無い日々を受け入れることが出来るかといえば、正直そこにも自信は無かった。

もう少し、自分が大人だったら違った考えができるのだろうか？とは思いましたが、このまま大人になった自分が、ただ年月を経ただけで決断力が変わるとも思えず、やはり答えが出ることは無いだろうとゆるく首を振ったとき、その眼に映ったものが不意に意識の片隅に引っかかった。

それが何だったのかを探るべく周囲に眼を向けてみるも、なぜこんな物が気になったのかと思うほどに何の変哲も無い丸いだけの石に眼を向けた。

それでも何処か釈然とせず、注意深くその周囲を探るも、やはりそれ以上何かが見つかることも無く。

気にはなるものの背に手に荷物のあるこの状況で、家に持ち帰ってもう少し観察してみようかとも思えないために、一度家に帰ってからまたここに来て見ようと考え、名残を惜しむというよりも一時の別れの挨拶をするように、そつとその石に触れようと手を伸ばす。触れたと思った瞬間、不意に視界が白光に包まれ、それに伴って何処か不思議な感覚に体が支配され。その変化に驚愕する暇も無く、まるで眠るかのように、意識が途切れていった。

眼を覚ました時、すぐに頭が混乱した。

あたり一面、見たことも無い場所。見たことも無い物で埋め尽くされた其処は、それでも何処かの部屋であるように壁があり、窓があり、そして床、天井、そして入り口があり。

その中であって自分は見たことも無い椅子に腰掛け、そして見たこともないテーブルで向かい合うように対面する誰かを見、それに気がついたその人は、緩く口元を綻ばせると、その口をゆっくり開き、優しい声音で、優しいまなざしで、見ているだけで落ち着けるような表情で

「ようこそ、珍しいお客さん」

と、そう言った。

それが、そこまでが僕の原初の記憶。その先は酷く記憶があやふやで、所々で抜け落ちたように曖昧で、しかし、其処だけは酷く鮮明で。それから先の遣り取りだけが重要であるかのように、その時の記憶はまるで焼きつくように記憶に刻まれていた。

第2話 はじまりはじまり

体を揺さぶるような揺れを感じ、何だろう？という考えが擡げたときには、これは自分が寝ているのだとような感覚を覚え、ならばこの揺れは誰かが僕を起こそうとしているのかなと思いつたり、その次には誰が？如何して？とさまざまな考えが次々浮かび上がり、そしてそれ以前に自分は寝ていたのだろうかということを考えるころには意識が覚醒し始め、その振動と同時に掛けられている声が入ってきた。

「少年、おい、起きろ。おい、おい」

酷く呆れたような、しかしどこか逼迫したような声音に、何かあったのかという思いを抱きながらも、ゆっくりと瞼を開き始めると、それに気がついたのか先ほどまでの声は止み、体に伝わる振動も停止し、それと同時に視界に入る景色に戸惑いを覚えつつも、ほっとした様な息を吐く音に、そちらへと視線を向ける。

「漸くお目覚めか。こんなところで寝てるとは、全く……。その服装から、まあ、山の民だとは思うが、山の民ってのは皆そうなのか？全く、呆れるというか肝が太いというか」

聞いたことの無い言葉、見たことも無い景色、見たことの無い装束に、見たことも無い人間。押し寄せるように飛び込んでくるそれらに、まるで付いていけずに戸惑っていると、先ほどと同じ声がまた耳へと聞こえてくる。

「まあいい。それで、少年。どうしてこんなところに居るんだ？見たところ一人みたいだが……。最近まで誰かと一緒に居たのか？そ

れとも…何かあつて止むを得ず一人でここまで来たのか？」

その声に、まるで吸い込まれるように視線を向けると、その声の主はやや心配げな顔をして此方を眺めていた。

未だ戸惑う僕には、如何答えるべきなのか、如何説明すべきなのか、それ以前にも聞きたいことや知りたいこと、さまざまに思いに考えがまとまらず、ただただ困惑し、何から話すべきなのが解らない。

そんな僕を見ても、未だ心配げな顔をしたままのその人は、「ゆつくりでいいぞ」と僕の頭を撫でながら、それでも優しい微笑んで見せてくれた。それに何故か懐かしさを覚え、次第に心が落ち着くを感じる。

「ここは、何処ですか？」

「此処は、つてのは国の名か？まあ、全部答えるか。ここはネスカ王国。今いるここは、西にあるキシム村からやや離れたところか。ほら、あそこに森が見えるだろ？森というか山なんだが。あれがキシム山だ。お前さんはあそこから来たんじゃないのか？」

尋ねては見たものの、やはり何一つ聞いたことの無い言葉が並ぶ。何一つ見覚えの無い光景を眼に、それもそうだろうとは思うものの、最後に聞いた言葉と同時に指差された所が少し気になり、そちらへと視線を向けるも、視線の先に映る光景には今まで僕が過ごしていたと思えるあの場所とは、全くかけ離れた景色しか映らなかった。

「違うのか？　なら、少年は何処から来たんだ？見たところ旅の装いでも無いし、一人でここまでとなると……。何でもいい、話せることだけでもいいから、何か覚えていることを教えてくれないか？」

変わらぬ表情に、氣遣いの伺われる声音。そして思い出されたのが意識を取り戻す前までに見た光景。

不可思議な空間としか言いようの無いその部屋で交わされた幾度かの言葉。

其処に居たのが誰なのかは解らないが、そこで交わされた言葉は、重く心に落とし込むように残されていた。そして、何故それを今まで思い出せずに居たのかはわからないが、不意に思い出したそれを口に乗せた。

「『ロスト』……というものを」

知っていますか？という言葉は不意に掴まれた肩の力に中断させられた。それを口にした瞬間、空気が変わったのが解るほどにその人から感じる気配が一転していた。

先ほどまでの表情が一気に強張り、優しげであった眼差しも鋭く探るような物となり、口調もまた厳しく責めるかのような、それでいて確たる意志を宿して。

「何処でその名を知った？ それは、知ってていいものじゃない」

「何処で、というのはわかりません。全く見たことの無い、部屋、なのかな。そこで聞きました」

「…それを言ったのはどんな奴だった？何故、それをお前に教えたんだ？」

「どんな奴…見た目は、ふとっちょの、おばさんという感じでした。あの人がどんな人だったのかはわかりません。ただ、その時話した

内容は…聞いても誰も信じない、でしょうね……」

その時のことを思い出しても、未だにそれが本当のことであるのかどうか、確信をもって信じることはできていない。あまりにも突飛な、というか、あまりにも断定的な物言いでもって、その人は僕にこういったのだから。

「どうも、僕の命は後五年で終わるそうです。それは、このまま過ごすならば、ということらしいですが」

それを聞いた目の前の人も、先ほど迄の責めるような鋭い視線から、やや戸惑いの色が見える物へと変えつつも、「それで？」と続きを促す言葉を向けてくる。

その声音に若干なりと優しげなものが含まれていたのは、この話を信じているからというよりは、この人の人となりがそうさせているような気がした。

「……終わりを迎える前に、ここまで尋ねてこれたなら、その運命に逆らう手伝いをしてあげる、と」

「…なんというか、想像に難しい出来事だが…それがロストと如何繋がる？」

「その人は言いました。この部屋こそが、ロストへと繋がる場所なのだ」と

「それはっ！」

がばりという音が聞こえそうな勢いで僕へと掴みかかったその人の言葉は、不意に聞こえ始めた何かの走る音に中断された。

同時に向けられた視線の先には、複数の獣と、それに乗る人影が此方へ向けて近づきつつある光景。

その内の一つが一群を抜けすぐ側まで来ると同時、目の前の人物へと視線を向ける。

「此方でしたか。隊長」

「どうした？何か問題でも？」

「この先の方で怪しい人物を発見したので、どうすべきかと」

「怪しい？どんな奴だ？」

「それが…言葉が通じないもので、如何にもお手上げの状態です……」

すぐ向かう、と言い残し、再び視線を此方へと向ける。

「少年、君にはまだ色々聞きたいことがある。少年もまだ知らないことも多いようだしな。出来るだけ待遇は良くしよう。私が答えられることは答える。その代わり、少年も私の問いに答えられるものでいい、色々教えて欲しい。それと、先ほどの話だが、あまり触れ回っていい物では無い。この話を知ってるのは、俺と少年だけ、それでもいいな？」

「…ありがとうございます。ます。本当に、僕は、何も、知らないみたいです。僕に答えられることは全て答えます。出来ることは全てします。僕にはもう、帰る場所も……どうか、どうか僕を……」

「隊長、馬を牽いてまいり…隊長？」

言葉に詰まり、その先が続かないでいる僕の頭に、そつとやさしく乗せられた手の感触が伝わる。

「余り思いつめるな。身寄りが無いのなら俺の家にくればいい。心配するな。それより今は少し急ぎの用が出来た。悪いが一緒に来てくれ」

その言葉に頷くと、先ほど顔を見せた馬と呼ばれる獣に乗り、此方へと手を差し伸べてきた。

僕を抱きかかえるように、馬の背の上で体の内へと収めたその人は、先ほど馬を牽いてきた来た人と二言三言言葉を交わすと、連れ立つように移動し始めた。

思い出された会話の中の言葉には、僕が住みなれたあそこには、もう二度と戻れないことを示すものも含まれていた。

全てを知りたければ、そこを出るしかないのだと。それを聞いた僕は、それでもいいと、そう、確かに言っただ。それに困った顔を浮かべてはいたが、あの人はそんな僕の選択をしようがないというように微笑んで頷いて見せてくれていた。

初めて乗るその馬という獣での移動は、さまざまな困惑と、身体的な苦痛もあったが、背に感じる気配と、流れる景色によって、僕には忘れがたい記憶として残っていった。

第3話 転がり始めた物語

「あいつか？」

その言葉に続いて、漸く収まった揺れに安堵の息を零した僕の耳に、やかましく騒ぎ立てる声が飛び込んできた。痛む頭を手で抑え、ゆっくりと声の聞こえるほうへ顔を向けると、数人の人影に囲まれるように佇む一人の男が見えた。

「はい、先ほどからあの通りです。動く気配が無いのはいいんですが、言葉が通じないので、どうにも」

「ネスカの言葉ではない、な。ならローエムか？」

「ローエムの言葉なら私も多少はわかるのですが、それとも全く違うのです」

「そうなること…言葉での交流は、流石に厳しいかもしれんな」

そんな遣り取りを頭上で交わす傍ら、僕は首を傾げていた。

「あの、えっと、あの人ですけど。『腹が減った』と先ほどから言ってるだけみたいですよ？」

「「言葉がわかるのか？」」

驚きの表情と共に此方へと向けられる視線に、それでも肯定を示すように頷いてみせると、二人は顔を見合わせた後、またこちらへと視線を戻した。

「すまんが、俺にはあの男の言葉がわからん。一緒に来てくれるか？」

「ええ。構いません」

それを聞き、馬から降りると僕を抱え上げ地面へと下ろし、これを持ってくれと食べ物と水の入ってるであろう水瓶を此方へ向ける。それを僕が受け取ったのを確認すると、腰にある剣の柄を、それが其処に在るということを確かめるように一度握り、それから行こうかという言葉と共に歩き始めた。

『…へえ、少しはマトモそうなのが来たな。っと飯付きとはうれしいね』

此方に視線を向けたその男は、僕達を見るなり先ほどとは打って変わった落ち着いた態度を見せ、その変化に戸惑っていた周囲の人影は、戸惑った気配を放ちつつも、男の視線を追って納得したように落ち着きを見せ始める。

「楽しんでいい」

そのお言葉と同時に、周囲に張り詰めていた空気が緩むのを感じる。

『どうやら大将のおでましかったですか？しかし、物物しいね。言葉が通じないってのはこういうもんか』

「…何を言ってるのか、さっぱりわからんな。本当にわかるのか？」

「え？あ、はい。大将のおでましだとか。言葉が通じないからどうしようとか」

そんな遣り取りをしつつ、僕の言葉は通じるのかな？等と思いつながら、眼の動きだけでこれをあの人にあげていいんですよね？と訪ねる。すぐに頷きが返ってきたことに僕はとてとて歩き、目の前の男の人の居るほうへ歩き始める。

『ありがとよ、坊主。いや、久しぶりの飯だな。見たことねえもんばっかだけど、大丈夫だろうなこれ』

「うん、えっと、これとかおいしいよ。あ、あとこれ水だから。どうぞ」

僕の言葉に、目の前の男はびっくりと肩を震わせた。

『おおおつ！坊主！おめえ、俺の言葉が解るのか！？てか、坊主の言葉も解る！？何だこれ！？いや嬉しいんだけどよ。おいおいおい、いややっとな開放されそうだなぞこんちきしょう！』

あまりの変わり身僕が唖然としてみると、周囲の気配が一斉に動くのが解った。

そういえば、周りの人達に取ってはこの男の人は何処の言葉が解らない言葉を放つ、謎だらけの人物なわけで。その人物が一転これほどまでに急激な変化を見せ騒ぎ立てると同時動きを見せれば警戒してもおかしくはないだろうと思っていると、その気配も一つの足音の近づきと共に落ち着き始めていくのを感じた。

「成程、俺にはさっぱりわからんな。少年にはこの言葉がわかるの

か？」

振り向いた先には困惑顔のままに此方へと歩み始める、隊長と呼ばれていたあの人がいた。

「はい。僕も何でかはわかりませんが……こんちきしょうってなんでしょう？」

「まあ……それは今考えないでおこう。それより、この状況をどうにかしないと。俺の言葉をその男に伝えてくれ」

こくりと頷く僕の後ろからは、ガツガツという音が似合うような勢いで、僕が先ほど迄持っていた物を平らげているであろう音が聞こえてはじめる。

「まずは、そうだな。何処の国の者で、何故ここに居るか聞いてくれ」

「はい」

そうして、奇妙な形の三者による遣り取りが始まった。

『俺の国？俺が居たのは倭国ってとこだが。ここはどうも違うよな？何処だここは？』

「倭国という国から来たそうです。ここは何処だって聞いてます」

「倭国？聞いたことないな……。どこかの村の名前か？」

「あのー、倭国というのは何処かの国にある村の名前ですか？」

『おいおい坊主、倭国ってのは国の名前だ。もう何百という年月も経ってんだ。倭国をしらねえのか？』

「国だそうですよ？何百年と前からあるそうです」

「…聞いたことがないな。なら、ネス力王国を知っているか聞いてみしてくれ。この大陸の者ならネス力王国の名は聞いたことが無いわけは無いからな」

「ネス力王国って聞いたことがありますか？」

『なんだって？ネス力？聞いたこともねえな。何だ、それがこの国の名か？』

「無いそうですよ？」

「どういうことなんだこれは……なら、何故ここにいいのか聞いてみしてくれ」

「はい、えつと、どうして個々に居たんですか？」

『それなんだけどな、坊主。俺にもさっぱりなんだよ。確か、俺は自分の家で寝てたはずなんだ……なんだが、眼が覚めてみりゃこんなとこに居たわけよ。さっぱりわからんままに呆然として、気が付いたら囲まれてたわけだ』

何だろう、どこか似たような話を聞いた感じがするけど、とにかく

くそれをそのまま伝えてみると、またかと言いたげな視線を向けられた。

『とりあえず、坊主。この周りの煩わしい奴らをどうにかさせてくれねえか？なんとも気分のいいもんじゃねえからな』

一つ頷いてそれを伝えると、考えるように視線を動かした後、それでもその言葉通りにしてくれた。

「さて、そうになると、この男も当ての無い身ということになるのか。その上、言葉も通じないとなると……下手にうるつかれると問題が増えるということか……はあ、わかった。これも何かの縁だろう。この男も俺の家に連れて行こう。今日は色々ありすぎて疲れた。帰ってゆつくりしてからまた整理しよう。とりあえず、俺の家にて続きを話そうと伝えてくれ」

「えーと、この人の家で続きを話そうってことだけど。おじさんもそれでいい？」

『おじさん、か。まあ、坊主から見ればそんなもんか。俺は何処でもいいんだが、言葉がな。坊主も一緒か？』

「うん、僕も行く宛てがなくて。この人のお世話になることになったんだ」

『へえ、何だいい奴じゃねえか。まあ、それなら俺も安心できるな。ああそうだ。俺の名前はマンジロウってんだけど、坊主の名前は？』

「マン、ジューオウー？」

『マンジロウ、だ。むずかしいか？ まあ、俺はマンジ、マンジつてよばれてっから、その方が呼びやすかったらそれでいいぜ』

「マン、ジ？ うん、こっちのほうが呼びやすいね。よろしく、マンジおじさん」

『…おじさんは付けなくていいぞ？マンジ、でいいぞ？マンジさんでもいいぞ？で、坊主の名前は？』

「さつきから、何を話してるんだ？」

「あ、うん、名前教えてって話してて。あ、このおじさんの名前はマンジさん、というそうです」

「そうか、そういうえは名を名乗ってなかったか。俺の名前も教えておこつ。そうだな、マルスと呼べばいい。本当はもつと長つたらしいんだが、覚えやすいほうがいいだろう。で、少年の名は？」

「マルス、さん。うん、覚えた。マンジさんに、マルスさん。うん。あ、僕の名前だね。僕の名前はヤトです。これからもよろしくおねがいします」

そついい、頭を下げた僕の耳には、二人から同時に了承と、同じようによろしくという言葉が聞こえてきた。その声に嬉しくなり綻んだ顔を上げたときには、同じような笑顔を浮かべたマンジおじさんの顔と、少し困ったような笑顔を浮かべたマルスさんの顔がこちらに向けられていた。

では帰ろつか、という言葉と共に、慌しく動き始める周囲の光景を他所に、僕は先ほど迄の何も知らず只戸惑うばかりだった自分が嘘のように、其処に在るということに馴染み始めていることに何処

が困惑しつつも、再び馬上から差し出された手を見て嬉しさが込上げてくるのを感じ、とりあえず今はそれ以上考えないようにしようと、一つ頷くとその手を取った。

後ろのほうで『俺はどうすんの？歩くの？』という声が聞こえてきた気がするけど、その言葉を理解できる者は一人しかおらず。結局それに僕が気がついたのは全ての準備が終わった後、それでは行こうかという時で。

「ごめんなさい、マンジおじさん。うかれてて気がつかなかった」

『……もう、いいよ。歩くよ……』

申し訳ない思いであやまりつつも、肩を落として歩くマンジおじさんの背中を見ると、何処か暗い何かを背負って歩くように見えはしたものの、その力強い足取りで歩む其の姿が様になって見えた僕は、問題ないのかなと思い、それ以上は何も言わないでおいた。

第4話 帰途

マルスさんが帰る、といい帰途に着いたのはいいのだけれど。

あれから既に五日が過ぎている。其の時の口ぶりから家は直ぐ近くにあるのだらうと勝手に考えていただけに、どの位かかるんですか？と聞いたときに帰ってきた答えには、さすがに肩を落としてげんなりとしてしまったものだ。

「まあ、そう落ち込むな。明日には着くだろう。もうすぐ街も見える。そしたらゆっくり休めばいい」

相変わらず馬に乗るのが慣れない僕に、それでも氣遣ってかゆっくり進んでくれているのに、どうしても苦い笑顔を浮かべることが出来なかった。

『なんなら坊主、また背負ってやるか？』

馬が駄目なら俺が背負うか？という言葉に、少し楽しそうだと二つ返事で頷いてみたことがあった。最初は肩車だおんぶだといろいろ楽しそうだなあとか考えていたのだが、実際にやってみると、楽しかったのは最初だけで。

肩車は創造していたよりも楽しかった。視点が高く、遠くまで見えるというのが新鮮で、歓声を上げてすぐくはしゃいでいた僕に

『よし、いっちょ飛ばすぜ！』

と、マンジおじさんが走り出した。

そこからが地獄だった。

僕の体が軽いというのがだめだったのか、それともマンジおじさんの足が異常なほどに強靱だったのか。自分の足が地に着いていないというのも相まってか、それはもう恐ろしい体験をした。

空が青かったということだけが、やけに心に残った。

涙目で訴える僕に頭を掻きながらすまなそうな顔で謝っているマンジおじさんは、じゃあ今度はおんぶしてやると言い、其の背に僕を背負おうとした。

背に乗ると、凄く痛い思いをした。思わず上がった悲鳴に

『あ、やべっ』

という声が聞こえた。其の言葉に言いよつの無い怒りを覚え、攻めるように睨み付けると、マンジおじさんはこれ以上無いほど肩を落としてしよげはじめた。其の様があまりにも似つかわしくなく、ふつつつと湧き上がる笑いの衝動を必死に抑えると、それを一部始終みていたのであるうマルスさんが、しょうがないとでもいうように苦笑しながら僕に手を差し伸べてきていた。

「変わった奴だな、あいつも」

「悪い人では無いです、きっと。でも、がさつと言うか…」

だろうな、といいつつマルスさんが僕を馬上の定位置へと納める。

「あの若さであの腕だ。これまでどんな生き方をして来たのか、俺みたいな仕事をしてると嫌でも解る。人がいいか悪いかは、まあ周りにどんな奴がいたかの違いだろうが、がさつなのは仕方が無いの

「かもしれんな」

「でも、一緒に居るなら直して欲しいものです」

そうだな、と頭を撫でながら零された言葉は、どこか自分には無関係だともいいたげな声音で。言葉が解るのが僕だけということ、その辺も全て僕に任せようとしているのでは？という考えが浮かぶと、それだけで酷く疲れを感じた。

「見えてきたな」

其の言葉に顔を上げて、僕の視点には未だ変化は無い。何が見えてきたのかな？と思っていると、周囲からも様々な声が漏れ始める。その声に顔を巡らして見ると、嬉しそうに顔を綻ばせている人が多かった。

何が見えたの？というようにマルスさんに眼で問えば、もうすぐ見えるという言葉が返ってくるだけで。首を捻りつつも暫くお馬さんが進むに任せて待つてみると。

「……何ですか？あれ？」

「見えたか？ここはネスカ王国の衛星都市、ラ・エクセ。そして、俺の住む街だ」

「大きい、ですね……」

「この辺じゃあ一番だな。王都に次いで大きい街だ。ここまでくれ

ばもうすぐだ。少し休んでから行くか」

目の前に広がるのはとても広大な景観。

飲み込まれるようなその光景に、ぽかんと口を開けて魅入っていた。それは何も僕だけじゃなく、隣に立つおじさんもそうだった。それに苦笑したマルスさんがいろいろと教えてくれた。

「あの、周囲を囲む様に巡らされているのがエクセの街を守る石壁だ。近くで見るとでかいぞ。そうだな、俺の三倍くらいになるかな？王都のはもつとでかい。さらにその倍はあるからな。

あの真ん中に見えるでかい建物がエクセの中心であり、街の要でもある砦だ。俺たちの様な軍属の者が居る場所であると同時に、役所みたいなこともやってる街の要所だな」

周囲を囲む壁もそうだが、其の中心に聳えるように威容を放つその建物も、始めてみるものであるからこそ目を引くが、それ以上に僕には

「ここには、どれくらい、住んでいるのですか？」

其の間を埋め尽くすように建ち並ぶ家々の多さに眼を奪われていた。その数だけの人間があそこには暮らしているのだと思うと。

「そうだな…定住、ということで見れば……二万、くらいか。此处は少し変わっていてな。流れ者が結構いるんだ。腕に覚えが有る者だが。この付近は色々あるからな。その辺のことも帰ったら教えておこつ」

「はい、お願いします」

では行くか、というマルスさんの声に、周囲が動き出す。それでもいまだ動かないマンジおじさんに、「そろそろ行くそうですよー」と声を掛ける。相変わらず愉快的顔で固まったままだったそれが、はつとしたような動きを見せると、首を縦に振って後に続いた。

進むにつれ大きく見え始めるそれが、遂に目前まで迫ったとき、それまで見上げたまままで疲れた首を正面に戻すと、其の石壁の前、川のような場所に掛けられた橋の上で、マルスさんと同じような装束を身に着けた二人の人影が、姿勢を正す。

マルスさんは馬から降りると其の二人に一言声を掛け

「それじゃ行こうか」

と、やさしい笑みを浮かべて馬上の僕に手を差し伸べた。

「ゆっくりしている。何か見繕ってくる」

マルスさんの家に入るや、そう言い残して消えた家主を他所に、僕とマンジおじさんは、所在無げに佇んでいた。

案内されて辿り着いた其処は、見たこともないほど大きな家だった。ここまで来る道すがら、目に付く家も、店と呼ばれる建物も大きいものはそれなりに眼にし、其の都度驚いてはいたものの、それより一回り大きいこれを目の前に「ここが俺の家だ」と言われたときは、其の言葉を理解するまでにかなりの時間が掛かった。未だ理

解できていないかもしれないけれど。

『なあ、坊主。あのマルスって奴は、偉い奴なのか？』

「隊長って呼ばれてたのは知ってるけど、それ以外知らない」

『なあ、坊主。ここじゃ隊長ってのは、かなり偉い奴なのか？』

「…きつとそうなんだよ。凄いつていうより、ああ、なんていうんだろ」

ゆっくりしているとは言われたものの、未だ案内された其の場所から一步も動くことなく立ち尽くす僕達の後ろ、深い溜息が聞こえて振り返ると、呆れたような眼差しを浮かべるマルスさんが、手に木の实らしき何かを持って戻ってきていた。

「これじゃ先が思いやられるな…あんまり難しく考えるな。今日からお前たちも此処で過ごすことになるんだ。すぐに慣れるとはいわんが、最初からそんな肩肘張ってちゃ疲れるだけだろう？」

まあとりあえずこちらに来て座れと、マルスさんの先導の下二人でおっかなびっくり付き従う。

辿り着いた場所はこれもまた広い部屋。其の部屋の真ん中にはテーブルと椅子が鎮座されており、その姿もまたこの家の威容に負けずなんとも触れがたい空気が漂って視えた。

「いいから座れ。ほんと疲れるな。ほら、いいから。俺も色々忙しいんだから。いいか、ある程度この家の説明したら、俺は今回の報告にいかんきやならん。その間、俺が帰ってくるまでお前等二人しかここには居ないんだから、そんなんじゃあだめだろう？いいから

座れ。そう、それでいい」

僕とマンジおじさんの相変わらぬ姿に、椅子を引き、肩を押さえつけるように、椅子に押し込むように僕達を座らせたマルスさんは、またも深い溜息を吐いた後、僕達の正面に向き合う形で腰を降ろすと疲れた顔をしたままに眉間を揉んでいた。

「とりあえず、疑問は後だ。必要なことを説明しておく。

まず、ここが食堂、飯食う場所だ。その右手の扉が台所、左手、廊下を挟んで先ほどまで居た場所が居間になる。で、廊下に出て左手が便所、右手に行けば応接間がある。

風呂もあるが、この家の中には無い。一旦外にでることになるが、まあ、風呂もある。

で応接間の脇に階段があつて、其の上が寝室、客間、まあ、個室がある。お前達二人はそこを使って貰うことになる。ここままで疑問は？」

僕はそれを聞いた端から同じ言葉をマンジおじさんに教えていく。

「僕は、特には。マンジさんは？」

『家賃とか、その辺はどうなるんだ？』

「家賃？」

「ん？ああそうか。それは気にしないでいい。見てのとおり、この家は広いが、住んでいるのは俺だけだ。掃除、洗濯、風呂の準備から飯の支度まで、自分でやることになるからな。まあそれらの経費は気にしないでいい。食材なども俺が適当にそろえておく。服装に関しては、そうだな、どうするか……」

それをまたそのまま伝えと、マンジおじさんは難しい顔をした。

『…要は、ここからでなけりや問題ないってことか？逆にいえば…』

其の言葉に、其の表情と声音に、少し冷たい物を感じたけれど、確かにマルスさんの言葉の意味とマンジおじさんの呟きを合わせて考えてみると、成程と思った。

「ん？どうした？」

其の変化に気がついたのか、マルスさんが声を掛けてくる。

「僕達は、ここから出られない、ということですか？」

其の言葉に、マルスさんの動きが止まる。次いで、チラリとマンジおじさんに視線が移ると、疲れたように溜息を零した。

「ずっと、というわけではないが、暫くは我慢してくれ。聞きたいことが多すぎる。其の間は出来るだけ不自由のないようにはする。ここ最近、色々と問題が多いんだ。それだけでも頭が痛いってのに、これ以上問題が増えると体がもたん。俺の為だと思って我慢してくれないか？」

げっそりとしたような印象を隠しもせず、それでも頼むように言われては僕としては逆に居心地が悪く身じろいしてしまう。そんな僕を見てマンジおじさんが『何だって？』と聞いてきたので、そういえば言葉がと慌てて先ほどの聞いたことを思い出しつつマンジおじさんに教えていく。

『ふう、まあこんな家を持つてる隊長ってほどだもんな。頭はるつてのは難儀なもんだ』

と言いつつ、同情の眼差しをマルスさんに向けていた。

そんな時に、遠くからノックの音と共に大きな声が聞こえてきた。其の声には聞き覚えが有り、視線をマルスさんに戻すと、頷きを残して「行ってくる」と言い立ち上がる。

その後姿は、どこことなく疲れを滲ませ、出来るならそつと眼を覆って、みて見ぬ振りをして上げたいと思えるほどに、今までのマルスさんには似合わないものだった。

第5話

対面

「隊長、議事進行に主要人物が揃ったそう、で？ あの、どうしたんですか？ 疲れた顔をなさってるようですが？」

「聞くな……。それで副長、俺の問題以外にも何かありそうか？」

「それが、同じような話題がちらほら」

「同じような？」

二人並び歩きながら、俺は首を傾げた。そもそも自分がキシム山方面へと出向いたのには、其の周辺で山賊によると思しき人為的な作物被害による形跡の調査であった。結果的には山賊などの類ではなく悪ガキ共の悪行であったことが判明したという結果ではあったのだが。

其の帰り道が逆に問題だらけだった。

ふと目に付いた物が気になり、隊を先に行かせてそれが何かと近づいてみると、山の民と思しき少年が倒れていた。

それも、一人で、だ。周辺には何もなく、旅の途中という装いでもない。たしかにキシム山まではこの少年の徒歩でも一日でいけるかどうかという距離ではあるうが、だとしても何故こんな所に一人で居るのだろうか？

それから目覚めた少年との会話も、ちぐはぐなところが目立つものの、それ以上にありえない言葉を口にした。

そう、あの少年は『ロスト』と言った。

今ではそれを知る者は数少ない。嘗ては栄光を意味するように、

夢を追うように口々に語られた時代も有ったという。

しかし、何時しかそれは、違う形へととなり、一つの時代を迎える為の鍵となった。

大陸を二分し、それについての情報を巡る、乱世へと。

醜い時代だと誰もが口にし、そして其の口火を切ったかの国は、今はもう歴史にしか名を残していない。

再びそれを繰り返さないようにと、それから先『ロスト』という名は廃れ、それが何を意味するものであるかということを知る者も減り、いつしか人々はそれすらも忘れて。そうして今の暮らしを送っている。

嘗ての戦乱を起こしたその王は、戦に狂った愚王であつたために引き起こされたのだと、そのように過去に蓋をして。

そして、もう一人。

誰も知らない国の名を口にし、此方の国の名を知らぬといい、何処の物かわからぬ言語を話す、不可思議な男。

佇まいから武に何かしらの素養がありそうだと思つてはいたが、帰途の道中見せられたそれは、そんな言葉で済ませられる物ではなかった。

道中、野営をした時に猪に出くわした。

それに眼を輝かせたあの男は、背に手をつ込むや、奇妙な形の剣を其の手に持っていた。

それから少年に一言声を掛けると、物凄い勢いで猪目指して走っていた。

少年に、あの男は何と言っていたのかいいてみたら、今日はシシナベだといったそうだ。

シシナベ？なんだろうそれは？そう思ったとき、重い足取りに顔を上げると、左手に先ほど見かけたと思われる猪を引き摺っていた。満面の笑みでそれをこちらに向けた時、其の背後から聞こえるもう一つの足音に、其の顔が切り替わる。鋭い、打って変わって冷たく、恐ろしいと思わず思えるものへ。

それから振り向くと同時、其の男は駆け出した。姿勢を低く、其の手にもつ剣も地を這うように。

猛る猪とぶつかると思った其の男は、其の横をすれ違い様に体を伸び上げらせ。

そして気がついてみると、猪の頭がごろしと落ちていた。

悔しいが、あの動きを眼で追えていなかった。それだけでも悔しいが、試しにと自分の剣を引き摺ってこられたもう一頭の猪の首目掛け落としてみたが。断ち切ることができなかった。

「隊長、たーいちよー？どーしたんですか？さっきから？」

気がつくと自分は考えこんで居たのか、家から出て数歩の所にまだ立ち尽くしていた。

少し考え事だ、と口にし、そういえば何か聞いていた途中だったかと思ひ至ると、先ほどの続きを副長に促した。

「はあ。大丈夫なんですか？調子悪いようでしたら、報告は自分が致しますが？」

「いや。あの二人の今後のこともある。俺がいったほうがいいだろう。それで、先程の続きを聞かせて貰えるか？同じような、といていたが」

その言葉と共に歩き出すと、数瞬送れて付き従う足音も聞こえ始

める。

「あ、はい。それなんです。東のほうにいった、第二隊のガークと行き会いました。その時聞いたんですけど」

「ガーク？ああ、オルドのこの副長か」

「はい。どうもそちらでも、その、理解の出来ない言葉を話す者に会ったと」

其の言葉に、再び足が止まった。頭の中、思考がぐるぐるとずまくのを感じる。

何が起こっているのか？

何かが起ころうとしているのか？

何故今このときにそんなことが？

他にも何処かで同じことが？

それと同時に、ふと浮かんだのは『ロスト』という言葉。

何故こんなにも都合良く、としか言えないようなまるで示し合わせたように不可解な現象と同時に其の言葉を聞くこととなったのか。無関係なのであろうか？

いや無関係であるほうがおかしい。

しかし、無関係であって、欲しい。

渦巻く思考を一旦落ち着け、それでもゆっくりと歩き出す。

「それで、オルドはその人物をどうしたんだ？まさかその場でさよならってことは、なかったんだろう？」

「はい、議場に招聘されている、とのことですよ」

「そうか。すくなくとも、家にいる片方よりは、色々と物分りのいい協力的な人物みたいだな」

「マンジ殿、でしたか」

一人の人物の名前と共に、二人同時苦笑が浮かぶ。そこで、ふと、唐突にとかいえないある疑問が浮かび上がった。

「そついえば、あいつも俺らにはわからない言葉を話していたよな？」

「ええ、あの少年、ヤト、でしたか。彼が居なければ？」

そこで二人は顔を見合わせ、再び来た道を振り返る。

「副長。スマンが先に向かって少し遅れる旨伝えてくれ。なるべく急ぐ」

「解りました。それでは議場にてお待ちいたします」

「ああ、それと、できればいい。そのオールドが連れて来たという人物に、議場の外で待たせておいて貰いたい」

「外、ですか？」

「できれば、いい。先にヤトとマンジに会わせてみたい」

「解りました。始まる前に間に合いそうでしたら、その旨伝えておきます」

それでは、と駆け出す副長を見送ると、マルスは来た道を駆け戻り始めた。

言葉が通じる可能性はどのくらいであろうか？そんな事を考えつつも、どこかでヤトと呼ばれるあの少年なら、あの時と同じように少し首をかしげながら「解りますよ？」というのではないかと期待して、さてどう説明して連れ出そうかと、マルスは痛む頭を押さえながら、近づきつつある我が家の姿に溜息を零した。

「さあ、気にしないでいい、今はできるだけ急ぎたい」

其の言葉と、早く乗れといわんばかりに向けられる背中に、僕は酷く落ち着かないで居た。

マルスさんが出かけて暫くすると、大音声と共に開け放たれた扉の音に、何事かとマンジおじさんと二人、そろーりと顔を出してみると、余程急いできたのか少し荒い息をしたマルスさんが此方を見て、「二人とも一緒に来てくれ」と言った。

それに僕とマンジおじさんは顔を見合わせた後、コクコクと頷くと、出来るだけ急ぎたいと言われた。

それならばとマンジおじさんが

『よし、坊主俺が』と言った瞬間、僕は「がんばって走ります」とマルスさんに答えた。

その間、大人な二人の間に、何かしら眼での遣り取りがあった様だが、行われたのが僕の頭より高いところでのことのためか、僕はそれに気がつかなかった。

走り始めてどれくらいであろうか、マルスさんの家が見えなくなつた辺りまで来た時。流石に大人と子供の体格の差からか、あきらかに僕は遅れていた。それを確認し、振り向いたマルスさんはこちらへと戻りその場にしゃがむと、俺の背に乗れと言い出した。

「氣にする必要はないんだ。此方の都合ですまんが、俺がだめならマンジの背中」

其の言葉に僕の体は反射的に動いていた。今までの葛藤やら抵抗やらが嘘のように。

「よし、走るぞ」

という言葉と共に、立ち上がったマルスさんはチラリと一度振り向くと、悲しげな視線を浮かべた後、しかし口を開くことはせず、再び前へと向き直り走り始めた。それに続いて聞こえてくる足音は、先ほどのマルスさんが浮かべた視線よりも、数段悲しげな響きに聞こえる、なんとも弱い足音であった。

「隊長！議事はもう始まってます。急いでください」

聞き覚えのある声に、顔を上げるとやはり見たことのある人が此方へと手を振っていた。あの人は確か副長と呼ばれていた人だと思う。

マルスさんは僕を背からおろすと、副長の下へと進み、何か尋ねるように話しかけていた。

二言三言の遣り取りが終わると、二人で此方へと振り返る。

「通じますかね？」

「そればかりは、実際に話してみないとわからんだろうな。二人とも、着いて来てくれ」

そう言つてマルスさんと副長が向かった先は、先日教えて貰ったばかりの、このエクセと呼ばれる街の要所といわれていた、あの大きな砦、という建物。物物しい外見に、近づけば近づくほど広大に見える作りのそれは、脚を踏み入れるのすらためらわれるほどに威圧的に感じた。

早くしてくれという言葉に視線を戻すと、もう結構な距離を歩き進んでいたマルスさんが此方へと振り返っていた。

『行こうぜ坊主。なに、坊主に何かありそうだったら俺が守ってやるよ。さながら俺は用心棒ってとこだな』

そう背を叩きながら笑いかけてきたマンジおじさんに、僕の不安も幾分か薄らいだ。それが表情にも出ていたのか、マンジさんは頷くと僕の隣を腕組みしながら歩き始めた。

階段を上り、暫く廊下を歩いていると、異様に大きな扉があった。そして其の扉の前には、この街に入るときにみたように、二人の人影がたっている。

マルスさんが二人に声をかけると、片方の人が斜め奥のほうを指差した。

視線でそれを追ってみても、特になにもわからなかった。廊下がそちらに続いているように見えたけど、そっちに行くのかな？

「さて。そういえばまだ説明してなかったな。実は、なんというか。別なところでも問題があったんだが……。もう一人、何を言っているかわからない奴が居たそうなんだ。ネスカの言葉とも、ローエムの物とも違う、まるで解らない言葉を話すそうで、な」

それで僕達が連れてこられたということらしかった。確かにマンジさんの言葉は僕しかわからないようだし、そうなると僕達ならわかるかもしれない、と思ったのだろう。

成程と頷きながら、その内容をマンジさんに話してみると、驚くほどにうかれた。えらくはしゃいだ。

その狂い様をマルスさんがなんとか宥め、先ほど示されたほうへと進んでいく。

こじんまりとはしてはいたが、あきらかに嚴重な、という扉の前でマルスさんが脚を止めた。

そして、其の中へと脚を踏み入れると、そこには二人の人影が在った。

「久しぶりだな、ガーク。元気そうだなによりだ。それで、そちらが？」

「お久しぶりです、マルス隊長。ええ、此方の方がそうです。その、

大丈夫でしょうか？」

「まあ、心配はいらないだろう。後は俺に任せて貰っていい。お前もオルドのところに戻っていいぞ」

マルスさんの言葉に、解りやすい程安堵の息を吐いたガークさんと言う人は、ちらりと此方を見た後、「それでは」という言葉とともに部屋の中から消えていった。

残されたのは、僕とマルスさんとマンジおじさん。

そして、目の前で未だ微動だにしない、髪の高い女性の四人だけとなった。

「さて、まずはどうしたものかな。言葉が通じないってんじやはじまらんし……」

『おう、嬢ちゃん。俺の言葉は解るか？』

「あの、どうでしょうか？」

てんでばらばらに零された言葉に、三人は同時顔を見合わせる。

その後、マルスさんは顔を手で覆い、マンジさんは罰が悪そうに下を向き、僕は。

その女性がこちらを驚きの目で見ている光景に、視線を動かすことが出来ず、固まっていた。

第6話

サンリアの魔女

「あの、えっと、僕に、何か？」

其の言葉に、はっとした表情を浮かべた女性は、其の表情の変化も数瞬、また先ほど迄と同じように感情を伺わせないそれに戻し、ゆっくりと口を開いた。

『……私の言っていることが、わかるかしら？』

「あ、はい。わかりますよ？」

『そう……ようやく、対話ができそうね。始めまして、私はエリーゼ。サンリアの魔女と呼ばれています。あなたの名前を伺っても？』

「あ、はい。僕はヤトです。よろしくおねがいします、エリーゼさん」

其の言葉と共に頭を下げると、礼儀正しい子ね、と囁かれた。それにちらりと顔を上げてみると、少しでも口元を綻ばせているのが見えて、僕も釣られたように笑顔になった。

「……、言葉が、わかるのか？」

其の声にそうだったと視線を移すと、マルスさんがどこか呆れたようにこちらを見ていた。それに首を傾げつつも、こくりと頷いてみせると、そうか、と頭を撫でられた。

そういえばマンジおじさんが静かだなと思って視線を移すと、難

しい顔で何か考えていた。

「マンジおじさんは、言葉、解らないの？」

『ん？ああ、俺にはわかんねえな。それに、マルスの旦那もわかってねえみてえだ。それなのに、俺らにや坊主の言葉がわかるし、あの嬢ちゃんにも通じてるんだろ？こいつはどうなってんだ？』

そういわれてみれば、不思議な感じがしてきた。そんな僕の難しい顔と、マルスさんの困ったような笑顔、そしてマンジおじさんの怪訝そうに僕とエリーセさんを見比べるような視線の動き。

『あら、どうしたの？そんな難しい顔して。ああ、言葉が通じる通じないってことね。うーん。少し、試してみていい？ ちょっと手を出して貰える？』

何を？と尋ねようとはしたものの、手を出すだけなら大丈夫かな？と僕は言われた通りに手を差し出してみる。其の行動にマルスさんとマンジさんが反応し、それを止めようと動き出したみたいだけど、僕が「大丈夫だよ？」と言葉をかけると、しぶしぶと言う感じではあつたけれど、それ以上動くことはなかった。

『随分と過保護なお二人さんね』

「うん、でも、二人ともいい人だよ？」

『そうみたいね。さて、少しだけ眼を閉じて貰える？』

頷き、眼を瞑る。差し出された手には、其の女性のものと思われる手が重ねられ。何か不思議と暖かい物を感じたと思ったとき、何

かが光ったような強い明かりが何処かで瞬いたように見えた。

「…もういいわよ。さて、改めまして、になるかしら。私はエリーセ。サンリアの魔女と呼ばれています。これで言葉は通じるかしら？」

そういつて微笑んで見せたエリーセさんの言葉に、マルスさんとマンジおじさんは、啞然とした表情のままに、僕とエリーセさんを見続けていた。

「順を追って話させてくれ。まず、確認だが、エリーセさんはサンリアという国に居た、ということでもいいんだな？」

「ええ、そうね。昨日までそこに居て、気がついたらあの場所に」

「では、ネスカという国の名も、ローエムと言う国の名も、聞いたことは無い、と？」

「無いわね。私の知る国はサンリア、ガレウス、ドルムンテ、後はエルデだけね」

「…どれも、聞いたことが無いな」

「でしょうね。先に述べた国は全て共通の言語でしたから。其の言葉が通じないとなると…」

「では、あなたも、『ここではない何処か』の住人である、と？」

「…それ以外に考え付かないわね。それともあなたには、違う何かに心当たりが？」

「違う何かも何も、『ここではない何処か』が存在するのかにも、全く覚えがないんだがな…」

先ほどの遣り取りが終わってみると、エリーセさんは普通にマルスさんと会話出来るようになっていた。何がどうなったんだろうと思っ
て聞いてみようと思いはしたものの、それより先にマルスさんが言葉を捲し立てていた。

そのあまりの変わり振りに付いて行けなく、ぼやっとしてたらマ
ンジおじさんに腕を引かれて、今は二人で部屋の隅っこにちょこん
と座り、そのやりとりを聞いている。

その間、マンジさんも静かに佇んだまま、二人の話に耳を澄ます
ように聞き入っており、しょうがなく僕も静かにそれを聴くことに
専念することにした。

「では、魔女、とっていたが、それは何か、役職みたいなものと
考えても？」

「役職、ねえ。ここには、魔法というものは存在しているの？」

「魔法？初めて聞くな。それはどんなものだ？」

「ああ、やっぱり…それで魔力の通りが……まあ、簡単に説明する

なら不可思議な力、とでも考えて貰っていいわ」

「不可思議な、力か。それは先ほどの光や、急に言葉が通じるようになったことに関係が？」

「ええ。あれも魔法ね。具体的な説明は、意味が無いでしょうから。まあ不可思議な、便利な力という認識でいいわ」

「なんとも…なら、そうだな。今後どうする予定でいるか、考えては？」

「そう、ね。まずそれをどうすべきか。あなたの話を聞く限り、こんなことは今までに聞いたことも無い出来事である、ってことなのよね？」

「こんなこと、というのは…まあ、そうだな。それこそ歴史が刻まれる前はわからないが。俺の知る限りには、これは前例の無い異常な事態だ」

「でしょう、ね。あの騒ぎようじゃあそうでしょうとも。手掛かりなしじゃあ、どうしようもないのかもしれないわね……」

どうしたものか、と呟いてゆるく首を振る女性。僕の隣では、相変わらず何時もの姿がかすんでしまうほどに静かなマンジおじさん。酷く違和感を覚えるけど、何故か様に成っている。

何時まで続くのかな？とそんなことをぼんやり考えながらマルスさんを見ていると、静かに、考えていたことが纏まったというように、それでいてすこし悩むように視線を揺らしながら此方を見ると、ゆっくりと其の口を開き始めた。

「……ひとつだけ、あるにはある。が、それすらも、探してみないことには、それが手掛かりとなるかどうか分からないものだが…」

其の言葉と同時、二つの視線がマルスさんへと差し込まれる。凍りついたようなその空気に、僕だけがキョロキョロと首を振り、其の静けさとその空気に居た堪れなくなっている

コンコン

「隊長、すみませんが、そろそろ来て頂かないと議事の方が」

という言葉に、再び部屋の空気が動き出すのを感じた。それによって空気が変わったのを感じ、ほっとしたのか溜息がこぼれた。

「すぐ行く」

とマルスさんは答えると、再び女性へと視線を戻した。

「とはいえ、おいそれと口に出せる内容でもない。すまないが、この議事が終わってから場所を移して、ということの問題は？」

「…まあ、いいでしょう。どちらにせよ、現状私にはそれに従う他ないでしょうし」

「助かる。それと、先ほどの魔法、というものについてだが…できるなら問題は少なくしたい。この議事が終わるまででいいんだが其の存在を伏せ」

そのマルスさんの言葉が終わる前、エリーセさんの手から先ほど気になった赤い光が瞬くのが見えた。

『これでよろしいですか？』

そういい、僕をみたエリーセさんに、首を傾げてみると、マルスさんは少し眉をしかめたあと、僕のほうを見て、なんと聞いた？と聞いてきた。

「これでいいですか？だそうです」

マルスさんは溜息をこぼしながら、優秀なことで、と零してこれで問題はないか、と呟くと立ち上がった。

「二人は、先に帰って…といっても、道があれば。すまんがもうしばらく待っていてもらっていいか？」

それに僕が頷くのをみると、相変わらず動かないマンジおじさんに視線を移し、行ってくるという言葉を残して、扉の向こうへと歩いていった。

第7話

挨拶

それから何をするでも無くぼんやりと座っていた僕と、置物のように静かに動きを見せないマンジおじさんと二人、其の部屋でマルスさんを待っている、再び扉の開く音が響き、釣られて視線をそちらに向けてみれば、そこに立っていたのは知らないおじさんだった。

その人はキヨロキヨロと辺りを見回し、僕と目が会つとにやりと寧猛な笑みを浮かべた。

「はじめまして、坊ちゃん。聞きたいんだが、坊ちゃん達が、マルスに拾われた二人でいいんだよね？」

其の声に楽しそうな感じが含まれていて、何だろう？とは思ったものの僕はコクコクと頷いた。

それを見た目の前のおじさんは、笑みを深くすると、視線をマンジおじさんへと向けた。あいかわらず置物のまま。なので、視線を戻してみると、おじさんが何故かうんうんと言いながら頷いていた。

「なあ、坊ちゃん。確かそっちの兄さんは言葉がつうじねえんだよね？　だつたらちよつと聞いてくれねえか？　退屈しのぎにちよつと外で手合わせでもしねえかって」

手合わせ？握手だろうか？でもここから出られないし、ここじやだめなのかな？と思いつつも、伝えるだけ伝えてみようかと視線をマンジおじさんに向けると、何故か溜息を吐かれた。

何でそんな態度をとられないといけないのかと、僕が少しぷりぷりし始めると

『なあ、坊主。なんでそのおっさんはやる気出してんだ？俺になんか用でもあんのか？』

と口にした。よくわからないけど、あの溜息はそんな理由だったみたいで、とりあえず先ほど伝えてくれと言われたことをそのまま伝えた。

『手合わせ、ね』

「ここじゃだめなの？」

『まあ、ここじゃねえほうがいいだろうな。ここじゃ狭えだろう？』

「握手するだけ、だよな？」

と、そんなことを聞いてみたら、何故か急に二人が静かになり、次いで同時に大笑いを始めた。

えっ？あれっ？何か違うの？ あれ、なんだろう、ちょっと恥ずかしい気持ちになってきた。

そんな風に遣る瀬無くオロオロしていた僕を他所に、二人は笑いを納めると其の距離を詰め、言葉が通じるでもないはずなのに、二人同時に手を差し出しあっていた。

それこそ、握手でもするように。

「いやはや、こんな形に収まるとはな。だが、これはこれでいいか」

『底抜けというか、世間知らずつつつか。だが、大きな騒ぎになるよりはいいか』

そうして其の手が握り合った瞬間。先ほどの笑顔とはまた違う、何処か凄みのある笑顔で二人は其の手を握り合っていた。

そこには、さきほどの大笑いのときののんびりとした雰囲気はなく、何処か張り詰めたような物が見え、どうしよう、これは止めるべきなのかそれともいやでも笑って、違ふあれは顔だけだけど、そもそも僕で止められるのかとおろおろまごまごしていると、

「何をやっているんだ…オルド。マンジ…は言葉が通じないか」

そんな呆れた声とともに、マルスさんが現われた。現われてくださった。

それに気がついた二人は、水が差されたとでもいうように、それでも何処か楽しそうな笑みを一度浮かべると、ぱっと手を離し、次いで距離をとるように離れた。

「よう、マルス。話には聞いたが、あの男はおもしろそうじゃねえか？どうだ、その坊主と一緒に家によこさねえか？」

なんですとお？と僕がそのオルドとよばれたおじさんを見上げると、それに気がついてかにつこりと、それもどこかニヤリというほうが似合う、少し背筋の冷える野生的な笑みを此方によこし、それから再び視線をマルスさんに戻す。

まさかそれは無いですよねっ、とふつふつと湧き上がる、まるで親に捨てられた小動物が抱くような涙の衝動を堪えつつ、マルスさんの表情を伺うと、それはとても白い眼で其のおじさんを射抜めていた。

「オルド、お前は明日からまた東征だろう。未だ夜盗は消えていないというじゃないか。そんなやつが何をいつているんだ…」

「あ？まあいいじゃねえか。だったら一緒に連れてけば」

「お前は……駄目だ。この三人には聞かなければならんことが多い。俺が預かる。わかつたらさっさと戻って明日の準備でもしてこい」

「準備つつつても、俺らは取り合えず戻ってきたただだからな。そのままとんぼ返りつてなだけだ。それ程時間はかからねえよ。な、だからそれまでの退屈しのぎに、その兄ちゃんを少し貸してくんねえか？」

「断る。おい、行くぞヤト。マンジにも伝えてくれ」

そついい、さっさと退出していくマルスさんに、あわあわとした僕はマンジさんに声を掛け、一度ぺこりとオルドさんに頭を下げるとマルスさんの背中を追いかけて駆け出した。

外に出てみると、もうすぐ日が暮れるという空に、今日はいろいろあつて疲れたなあと、背伸びをしながら考えて、そういえばエリーセさんはどうなったんだろうときよろきよる周囲を見回してみる。

「ん？どうした？」

というマルスさんの声に、エリーセさんは？と聞いてみる。どうも女性と言うことで、生活する上でのあれこれと色々考慮しなければいけないことも多いらしく、その辺の準備のために少し時間が掛かるだろうとのこと。それで今は副長と呼ばれていたあの人が、商

人さんと手続きを行っており、その書類が出来次第ここに連れて来る、ということらしい。それまではこの場で待機。

「今日から四人生活、か。なんだか急に騒がしくなったな」

今までも色々と問題だらけだといっていたが、そこにもう一人、エリーセさんも加わることになり、マルスさんはここに来たときよりもよりいっそう疲れたような表情をうかべていた。

「あの、その、ごめんなさい……」

それに居た堪れなくなった僕が、そう呟くと。それでも疲れた顔に笑みをのせ、僕の頭をぐりぐりと撫で始めた。

「お前が気にすることじゃない。これはきつと……誰かの、何かの……いや、ただの巡りあわせって奴だ。どうにも俺には、生まれたときからこんな事が多くてな。だからこれはきつと俺の体質のせいさ。お前が悪いわけじゃない」

そついい、未だぐりぐりと揺れる頭に、後ろから掛けられた声が届く。

振り向くとそこには二つの人影。

一人は副長と呼ばれているあの人。

もう一人は、これから共に過ごす、髪の長い女性。

相変わらず何度見ても慣れそうに無い大きさを誇るマルスさんの家に辿り着くと、やはり少し萎縮してしまい、戸惑い気味の僕と、同じように所在なげにちらちらとこちらを見るマンジおじさんを他所に、家主のマルスさんと、其の後に平然と着いて歩いて其の門扉を潜るエリーセさんに、怪訝そうな視線を向けられて、半ば強引に腕を引かれての帰宅となった。

「まったく、何時になっただら慣れるんだ……。まあいい、今は疲れている。先に飯の準備をしよう。このなかで料理をしたことの無い奴はいるか？」

マルスさんの其の言葉に、手が三つ拳がる。それに愕然とした表情を浮かべて肩を落とし膝から崩れ落ちたマルスさんは、今日はずう立ち上がることも出来そうにない程弱々しく見えた。

あ、立った。

「……明日からは、料理ができる奴を寄越してもらうことにする。今日は俺ももう氣力が湧かん。適当なものを買ってくる。しばらく待ってろ」

そう言い残して去っていくマルスさん。ごめんなさい。本当にごめんなさい。

帰ってきたマルスさんとともに、並べられた物に各々の食指が伸びては消え、伸びては消える其の時間が終わると、居間へと促される。

「さて…ヤト、すまんが彼女に言葉をわかるように、と頼んでくれるか？」

こくりと頷いてそれをエリーセさんに告げると、ひとつ頷いた後に其の手が赤く瞬く。

「これでいい？」

「助かる。……それは、あの男にも、同じようにすることができるか？」

そう言ったマルスさんの指が指し示した先は、マンジおじさん。エリーセさんは少し考えた素振りのを見せた後、僕に右手を上げる様に伝えて、と言った。

それを僕が伝えると、おっかなびっくりという挙動でマンジおじさんが右手を差し出す。

それに重ねられたエリーセさんの手を見て、マンジさんがおろしつつも何処か嬉しそうな顔をしていると、また赤い光が瞬く。

「魔力は、通るようね。成功かしら？」

「……わか、る。なんだあの光？妖力の類か？」

「私のところでは魔法、と呼ばれていたわ。まあ、ここでは其の名に意味はないでしょうね。不思議な力という認識で、名前は何だっ
ていいでしょう」

それからマンジおじさんはずっと表情を改めると、不意にマルスさんに頭を下げた。

「言葉が通じないとはいえ、今までの礼がまだだった。助けていた
だいて感謝いたす。我が名は佐野 万次郎。倭国が浪人。礼の遅れ、
どうかお赦しを」

その変貌ぶりに、僕がついていけずびつくりし、それを向けられ
た先のマルスさんへと視線を戻す。すると此方も居住まいを正し、
表情を改めると口を開く。

「此方こそ、急な願いをお聞き入れされし礼、未だせずに申し訳な
い。私の名はマルセイルス・レント・メンシオール。ネスカ王国ラ・
エクセ皆軍第一隊長。今後もどうか私に助力を」

どこか緊張を要する其の遣り取りに、僕はどうしたらいいのかわ
からずきよきよと視線を左右させると、そこに小さな溜息が聞
こえ、縋る様にそちらへと視線を向けると

「我、サンリオの魔女にしてサンリオが王の末姫。名をエルシオー
ヌ・ミスト・サンクレイム。未だ一人では何も出来ぬ身。望めるの
なら友好的な関係を」

そう口上を述べたエリーセさんも、一糸乱れぬ不動の姿勢。

何故か追い詰められたという感じがした。僕だけが一人場違いな、
異物でもあるかのような。

それはただの僕の勘違いだろうというのは頭の片隅にあるけれど、
しかし。何かを言うべきだ、しかし何を言えいいのか、それが出
来ないのならやはり僕はこの場では。

そんな焦燥の念に、逸る思いを押さえつけて先ほどの遣り取
りを必死に整理する。

「あ、あのっ！その、僕は、ヤト、と言います。その、ありがとう、
ございます……」

しかし、いざそれを口にしても、やはりそれが場違いでしかないように聞こえ、次第に尻すぼみになる其の言葉に、やはり何の反応もなかった。

やはりという思いに、涙が浮かびそうになり、俯く僕の頭に大きな手が乗せられた。

「気にするな。初めてだったんだろう？ その内にも覚えればいい。慣れればいいだけだ。急ぐ必要もない。それよりも、よくあそこでこの流れに着いていこうとしたもんだと、褒めたいくらいだ」

その言葉に顔を上げると、マルスさんの笑顔がそこにはあった。それに嬉しくなり、それでも未だ胸に燦る物に、言葉を紡ぐことができず、僕は只頷くことしかできなかった。

「すまん、坊主。いきなり硬っ苦しい空気にしちまって。だが、俺もけじめだけはどうしてもつけとかねえと座りがわりいんだ。勘弁してくれ」

其の声に視線を移すと、困ったような笑顔のマンジおじさんの顔が見えた。其の表情は何時ものように、見守るような優しい眼を見せ、それに安心したのか僕も自然に頷いていた。

「そうね、少年ヤト。私はあなたにもこれ以上ない程に感謝しています。出来るならば、これからも仲良くしましょう」

微笑を浮かべ、慈しむ様な其のまなざしは、どこかくすぐったく、それでも何故か今日であつたばかりであることが嘘のように、何処

か懐かしく感じられた。

それと同時に、僕の胸に沸き起こる感情。

それがまるで出口を求めるように、外に出たいとせつつく様に。それに押されるように口からこぼれた其の言葉は

「はい！これからもよろしく願いします！」

元気な、明るい声となり、その場へと大きく響き。

これから先もきつと楽しい日々が送れるだろうと、僕は嬉しそうに笑顔を浮かべた。

第8話

はじまりを告げた記憶

その夜は、それでお開きとなり、各自使う部屋を決め、そのまま就寝ということに。

朝、皆が置き次第また居間へと集まって話を聞こうということに。

僕が起きて居間に足を踏み入れると、そこにはまだ誰もいなかった。

余りうろろろするのもあれかな？と思いここで待っていようかそれともそんなことは気にするなと言われているのだから色々見ておこつかさてどうしようと考えていると、何処からか物音が聞こえてきた。

何処から？何の音？と気になりふらふらと歩いていると、家の外、少し開けた場所にマンジおじさんがいるのが見えた。

「おはようございます、マンジおじさん。何してるんですか？」

「おう、坊主。起きるのはええな。マンジお兄さんは朝の鍛錬つてやつだ」

することも無いので少し見ていいですか？と聞いてみると、問題ないという返事を貰ったので、僕はその辺の草の上に座り込むと、其の言葉に甘えさせて貰って皆が起きるまでここに居ようと決めた。

不意に視界に影が差し、振り向いてみるとマルスさんが立っ

た。

「おはよう、ヤト。ふたりとも早いな」

僕も挨拶を返し、マンジおじさんの方へ視線を戻すと、朝の鍛錬というのはもう終わりなのか、此方へと近づいてくる。

「おはようさん。マルスの旦那。揃ったのかい？」

「おはよう、マンジ殿。もういいのか？」

「ん？ああ、あれはただの時間つぶしだ。気にしないでいい。それとその呼び方もなんだな。マンジでいいぜ？そっちのほうが慣れてっからな」

「そうか。ならこちらもマルス、と。軽くなら食べるものもあるが、どうする？先に食べておくか？」

「そうさなあ。どう考えても軽い話し合いじゃ終わんねえだろうし。あるなら先に何か食っておくか」

そうして三人で歩きつつ話しながら食堂へと向かうと、少し送れてエリーセさんもやってきた。

「さて、此方へと来た経緯は大体聞いているが。もう少し詳しく聞きたい」

再び居間へと戻ると、マルスさんは表情を改めて口を開いた。

「まずは、そうだな。エリーセ。そちらの、世界、というのか。そこにある魔法という力には、誰かを何処かへと送るような類の物は無いのか？」

マルスさんがエリーセさんへと疑問を述べた。

エリーセ、と名を呼び捨てにした理由は、彼女がそれで言いと言ったのと、そうしたほうが僕にも判り易く会話もし易いだろうという理由。それに頷いた二人は今後そうすると告げ、ではこちらもということに。

「聞いたことは、ないわね。私も全てを知るわけではないけど、それでもそこまでのものとなると。さすがに人の域を超えた力であろうとか」

「そうか。なら、マンジの世界ではどうだ？」

「うーん。俺んとも同じだと思うぜ？妖力つてのがあるのは知ってるが、それだとして火を出す風を起こす、まあ出来てもそんなくらいだって話だし」

「…それですら驚愕ものだな。となると、そこには手掛かりは無しか」

「うん？坊主はどうなんだ？」

「僕？」

「おう。ん？坊主はもしかしてここの世界の奴なのか？」

其の言葉に僕も首を傾げる。

確かに僕はこんな場所は見たことも無いし聞いたことも無いけれど、それは只あの場所から出たことが無いだけで。あそこから外に出ていたらどんな場所だったのかというのがわからない。

そうである以上はもしかしたら別の世界とやらに住んでいたのかもしれない。

でもどうなんだろう、とうんうん唸りながらもそれを口にしてみた。

「成程な。それじゃわかんねえか」

「隔絶した場所に、外の情報もなしだとね」

そんなエリーセさんとマンジおじさんの頷きと共に零れた答えに、マルスさんだけが首を横に振っていた。

「ヤトはこの世界の人間だろう。昨日いったらどう？手掛かりとなるかもしれないものがあると。其の名は今では秘匿されていることなんだが。何故かそれをヤトの口から聞いたからな」

それで視線が集まるのを感じる。それでも同時に頭に乗るせられた何時もの暖かさに、少しほっとしつつもどうしたらいいのだろうとマルスさんを見上げる。

「ヤト、俺と出会ったとき、あの時は途中になったが、あの話を聞かせて欲しい。覚えている限りでいい。出来るだけ詳しく。」

それと、マンジにエリーセ。これから話すことはここだけの話、ということにしてほしい。昔それで国が滅んだ歴史があるからな」

其の言葉に続けて、マルスさんが力強く頷いた。首をめぐらせて見ると、エリーセさんもマンジおじさんも固い表情ながらにしっかりと頷いていた。

それをみて少しからだを硬くした僕だけど、それでもあの時のことを必死に思い出そうと努力した。

「えっと。どこから話せばいいのかな…その、覚えてる最初から話します」

そうして僕は、記憶に残されたさの緑に囲まれた場所に一人、籠を背負い手に水瓶を持って歩き出す場面、そこから先に起きた出来事を話はじめた。

「ようこそ、珍しいお客さん」

其の声に、僕も言葉を返す。
はじめまして。

此処は何処ですか？

「ロストへ至る場所。名前をいうならそんなところね。今では私の家みたいなものかしら」

そうだったんですか。突然お邪魔してごめんなさい。

でも、どうして僕はここに居るんですか？

「あなたが『あそこ』を出たいと願ったから。本当ならここに来る必要もなかったのだけど…あそこにはもう、あなたしかいなくなっちゃったのよね」

はい…。ナナちゃんも、マルク兄いも、マゴ爺も、オジおばさんも…。

気がついたら、あそこに残ってたのは僕だけになっちゃいました…。

「一人で、辛かったでしょうね。今まで良く頑張ったわ」

そう、なんででしょうか。よくわかりません。

…僕は、あそこを出たいと願ったんでしょうか？

あそこを出ても、僕はこれからどうすればいいのかわかりません。何を頼りに、何を求めて生きていけばいいのかも。

「そうね。辛いかもしれないでしょうけど、聞きなさい。あなたに残された時間はおよそ五年。それを過ぎると、あなたはもう存在できなくなる。但し、それは何もしなければそうなるというだけ」

五年？ですか。それだけ生きていれるなら、十分な気もするけど。

「…いいえ、あなたはまだ若いでしょう？今からそんな事を考えてはだめよ。」

あなたは、あそこから出たことがない。なら外を、世界を色々見て歩きなさい。

沢山の景色を、沢山の風景を。

沢山の人を、沢山の表情を。

沢山の生活を、沢山の営みを。

あなたは何も知らない。何もしていない。それなのに後五年で終わりを迎えるというのに、それを受け入れよう等と考えてはだめ」

…なら僕は、どうしたらいいのですか？

「世界を巡り、『ロスト』と言う言葉を追いなさい。そして、今度はきちんと、あそこの扉を開いて此処を訪れなさい。そして私が、あなたのそんな運命に逆らうために全力を尽くすと約束するわ」

僕に、出来るでしょうか？

「何もしなければ何も出来ないわ。出来るかどうかは私にはわからない。でも、それをしようという気になれば、私は何も手伝えない」

…外の世界って、どんなところですか？

「とても広いわ。色々な景色があり、さまざまな動物が居て、沢山の植物が生きている。

笑顔の似合う人も居れば、泣いてばかりの人もいる。歌を愛する人もいれば、下ばかり向いて歩く人もいる」

楽しみなような、怖いような。

「ふふふ、それでいいのよ。最初から全て出来る人はいない。色々見て、聞いて、感じて、思い通りに行くときもあれば、何度やつても失敗する、なんてこともある。

何もしなければ、何も始まらない。

まずは、はじめることから始めないと」

はじめる、ことから、はじめる

「そう、あなたがここにいるのは、はじめるため。ここを出てからが始まり。」

さて、君はそろそろ行かないといけない」

はい

「『ロスト』という言葉覚えておきなさい。それがあそこの扉を開くための鍵よ」

はい

「それを求める旅には困難が付き纏う。だけど、諦めたらだめ。決して折れず、立ち向かって、必ずここへ辿り着くこと」

はい

「……それじゃあ、体には気をつけるのよ？頑張ってね」

はい。ありがとうございました。

「いつてらっしゃい。『ヤト』」

はい！いつてきます

第9話 これから

僕が話し終わると、三人共静かに、考え込むように瞑目し、動きを止める。

暫くこのままなのかなと視線を左右させ。それから長く話したためによる喉に渴きを覚え、飲み水を持ってきますと断わりを入れて食堂に向かう。

居間へと戻り、テーブルに近づくと其々の目の前に水の入ったコップを置き、先ほどまで座っていた所へと自分も座る。

「それで、マルスさん。先ほどの話と、昨日言っていた『手掛かり』と、どう繋がるというの？」

それまでの静寂を破ったのは、そんなエリーセさんの言葉だった。

「 こんな命に惜しみなど 唯の一つもありはしない 願いが一つ叶うなら 全てを捨てて我は行く」

呟く様なひっそりとした音声。それでいてしっかりと耳に残る、まるで詩のような響きのそれに、それを声に乗せたマルスさんは、未だ瞑目したまま考えるように俯いていた。

それからすつと顔を起すと、引き締まった表情を乗せ、何かを決意したように口を開く。

「先の詩は、古い伝承に残る、俺が知る数少ない『ロスト』に纏わるものだ。それがどんなもので、何処に在って、どのようにして、という記録は世間一般には一切残っては居ない。ただ、『ロスト』を追う者が口々に言っていたと言われていたのが、それらしい。」

何処にあるかもわからない物を追い、過酷な旅を覚悟の上、それでも叶えたい願いがあるなら、全てを投げ打って追い求めると」

「…ロストへと至る場所、ロストは鍵、其の部屋へと至る扉…運命に逆らう、願いが一つ叶うなら…元の世界へと至る道を探る？…たしかに、僅かながら可能性はありそうね」

「あくまでも、古い伝承だ。一度言ったが、それを求めたが故に昔一つの国が滅んだ。それから緘口令が敷かれ、それまでに残された伝承は悉く闇に消えた。だからこそ何処かで歪んだ伝承として残った可能性もある。ヤトの話からは、あの詩を想起出来る面もあるが、確証には至らない。少しの可能性が残されたただけだな。それだけで過酷かもしれん道を歩むというのみな」

「…とはいえ、手掛かりがそこしかないのなら、他に道もないでしょうけど」

「そう、だな。本筋は『ロスト』の搜索、其の傍らに、『此処ではない何処か』の記録があるかの調査、ということになりそうだな」

盛大な溜息の音とともに、再びの静寂。静かにしながら話しを聴いていたけれど、僕には少ししか解らなかった。それでも最後に聞こえた、『ロスト』を追うのが一番いいらしい、というところだけは、なんとなく理解でき、それなら僕も一緒に連れて行って貰えるかな？とそんな風に考えていた。

「なあ、マルスの旦那。少し気になって考えてたんだが……言えないなら言わなくていいが、とりあえず聞いてくれ」

そんな時。ふと、難しい顔をしたマンジおじさんの声が聞こえた。

「この国の情報収集、諜報についてだ。見たところ、情報の遣り取りは手紙かなんかになるだろうが、幾ら急いでも、早馬を越える手段はねえように見える」

「まあ、そうだな。それで？」

「ここに集まる情報ってのは、どの位の範囲までの情報が入る？」

「ここから西に、馬で片道で十日、東のことは王都へと行くな。それがどうした？」

それからぶつぶつと何やら呟くマンジおじさんを、マルスさんは怪訝な表情で見、エリーセさんは、少し緊張したような表情で二人を見ていた。

「あくまで可能性だ。いいか、俺とその姫さん、それに坊主が、ここから西に行った所に三人だ。いいか、ここだけで三人だ（・・・）」

それからマンジおじさんの言葉は尚続いた。

それも、あくまでも大人しく着いていっただけで、三人だと。

この世界は、広いんだろ？ だったら、此処以外のどこかにも、同じように俺らみてえなのが現われてもおかしくねえんじゃないのか？ と。

「見つかる前に姿を隠した者。人が居ない山奥に隠棲している者。訳ありなのだと匿われている者。可能性は十分あるわね」

それに顔を顰め、唸るように喉を鳴らしたマルスさんに、さらにエリーセさんも言葉を被せる。

「なあ、旦那。俺はな、元の世界じゃ追われる身だったんで、特に戻りたいという気持ちもねえんだ。だがな、この国の為にかしたって訳でもねえ。」

だが問題はな、そんな追われる身の奴だとか、そんなものも関係なくこっちの世界に来ているってことは、旦那にとっちゃ看過しないことなんじゃねえのかってな」

「…マンジ、感謝する。確かにそれは考えてなかった。いや、この問題さえ片付けばそれでいいとすら思っていた。少し考えれば、いやこの国を思えばこそ広い視野で見なければ成らなかったってのにな」

マンジおじさんはおどけたように肩を竦め、しかたねえさ、と漏らした。

俺はそんな身の上だから、もしもあそこで旦那達に会わなかったら俺はどうしていただろうな、と考えていたと。

それから、表情を改めると、其の可能性があると、何処か情報が集まりやすい場所は？と尋ねる。

「一番集まるとなると、やはり王都だろう。だが、集まるからと言ってそれはそう簡単に耳に入れることはできんだろうが」

「ああ、そうか。姫さんは元の世界に帰りたいんだっけか。なら色々聞ければってことか」

「その姫さんってのは好きではないですけど。エリーセでいいと

「いつているでしょう?」

「いいじゃねえか、そんなもん」

「…そう、なら私も今日からあなたを「ミ」でも呼ぼうかしら? いいんでしょう? 呼ばれ方などどうでも?」

「…いや、いやいやいや。それは人としてどうよ?」

「相手が嫌がろうがどうしようがどうでもいいのでしょう?」

「はいすいませんごめんなさいぜひとも、是非にともマンジとお呼びくださいエリーセ様」

「…そう」

マンジおじさんがとても小さく見えました。どうもエリーセさんの方が上ようです。

暇つぶしの僕の観察の報告でした。

「聞いてくれ。今すぐに、とはいかんが、王都に向かおうと思う。これから今の話をまとめて、まあ伏せるところは伏せてになるが、調書を書き終えたら王都への出立許可をてつと来ようと思う。」

それに関してだが、幾つか決めておこうと思う。

エリーセ、一応魔女という肩書きだけとし、末姫ということは伏せて欲しい。

マンジ、追われる身であったというのはここだけの話ということにする。

ヤト、山の民ということにするが、お前も此処では無い何処から来たということにする。

出立を申請してからも、認可が下りるまでは多少時間がかかるだろう。それに一緒に連れて行くとしても協力的である重要参考人物、と言う形になると思う。多少の制限はつくかもしれない。

それでもよければ、一緒に王都へと考えているが、どうする？」

マルスさんの表情は真剣で、しかしその問いにエリーセさんは神妙な表情で、マンジおじさんは少し楽しそうな笑顔を浮かべながらも其の言葉には即座に了承の言葉を告げていた。

それにマルスさんも視線を向けて頷いて見せると、ずっと僕のほうへ顔を向けた。

視線で語られたそれは、「どうする？」と問うようなそれ。

僕の答えなんて決まっている。

だって、まだまだ暫く、皆と一緒に居られると解ったのだから。

「よろしく願いします」

と元気に下げた僕の頭に、何時ものように大きな手が優しく乗せられた。

話し合いから二日。出立の認可が取れるまでの間、僕達は旅の準備を始め、この世界についてマルスさんに説明を受けたり、またエリーセさんの魔法、マンジおじさんの腕を見せて貰ったりと、其々に情報を交換しあいながら有意義な時間を過ごしていた。

その日も庭先にてマンジさんの鍛錬を僕はぼーっと見ていると

「マルセイルス・レント・メンシオール様宛の書簡をお預かりしております」

と、そんな言葉が聞こえ、僕は何だろう？とそちらを向くと、マンジおじさんが「旦那を呼んでくればいい」と言っただのでそれに頷き、呼んできますので少しお待ちくださいと言い残してから家の中へと脚を運ぶ。

マルスさんはその人から何かを受け取って、それを眺めて複雑な顔をした。

手に持つそれを開け広げ、何かを眺めると更に複雑な顔になる。何だろう？と近寄ってみても、それにすら気がついていないようにで暫くそれが続いたと思うと、漸く僕に気がついて、「状況が変わった。少し話がある」と僕とマンジおじさんを家の中へと促した。

「明日から王都へ向かう。急な話ですまんが、準備をしてくれ」

そう言うや、引継ぎをどうするか？ 西南方面の巡回準備は、等ぶつぶつ呟き、呆気にとられたままの僕達は丸で視界に入っていないかのようにすたすたと歩き、玄関の閉まる音を残して消えてしまった。

良くわからないままに、それでも明日にはということなので、それぞれに自分の荷物をまとめ、それから野営に使う物やら食料やらをまとめていく。

準備が終わり、とは言え何かすることが有るでもなく。一体どう

したのかと考えていたときに、マルスさんが帰ってきた。

「…昔馴染みの、というか…一人、手に負えない同僚が王都にいてな。やはり、王都にも何件かそんな話がきているらしい。それでここエクセにもそんな話が集まっているのなら、それを報告しに来い、という手紙が届いたんだ」

そういい、諦めたような顔で溜息を吐くマルスさん。

「…要注意人物である者を王都に招くように書かれていたとは思えません？」

「ああ、そこまでは書かれてはいない。居ないが…もし連れて行かなければ、連れて来いと言われるのは明白だからな…」

「それに従うしかない、という関係…ということは、余程上位の立場の者だと？危機管理に対する認識がゆる過ぎるのでは？」

呆れたようなエリーセさんの表情と声に、マルスさんも反論するでもなく、正にそうだとも言いたげに苦い顔をする。本当にあいつは、あいつの我が侏加減は、など、それを言葉にのせることでその苦い物を外へと吐き出すようにブツブツとつぶやいている。

「まあ、私としては王都へ行けるなら何でもいいわ。情報の集まりやすい地、歴史の残る地であるというなら。調べるにしたところで時間はかかるでしょうし。早くなるに越したことはないわね。望めるのなら、地位のある人物にそれらを調べる自由を約束させて貰いたい、というところかしらね」

「それについては、大丈夫だろう。この相手というのが、それ以上

ない程の奴だ」

「それって……この国は大丈夫なの？」

「一人だけ毛色が違ったというか……とはいえ、あいつは三番目だ。余程のことが無い限りは問題ない、とは思っただが……」

相変わらずに難しい話をするマルスさんとエリーセさん。エリーセさんが呆れながらに口を開くと、それに答えるマルスさんが、どんだん歳を取っていくように見える。

そんな時、今まで静かだったマンジおじさんが、難しい問題を出されたようなやや困った顔で、恐る恐るというか、やや自信なさ気な声で、マルスさんへと言葉を向ける。

おおよそでは検討つくんだが、結局それはどんな人物なのか？と盛大な溜息をこれ見よがしに吐き出すと、何かを諦めたような顔のままに

「ネスカ王国第三王子、マクスハイム・オウル・エステシア・ネスカ殿下だ」

其の言葉に、エリーセさんは何かを否定するように首を振り、マンジおじさんは余程衝撃的だったのかそのまま固まり、僕はよく解らなかったたので首を傾げた。

一夜明け、早朝。マルスさんも仕事関連を昨日の内に問題の無い様終えてきていたために、日の昇る前からの出立ということになっ

た。

王都までは、のんびりとした旅程で向かったとしても五日もあれば辿り着く。強行軍で、早ければ三日の距離らしい。少し大回りになるが、途中にある村を経ても、六日もあれば辿り着けるとマルスさんは言った。

出来るだけ急ぎたいとの意見には、エリーセさんが少し難しい顔をした程度で、誰も文句をいうことなく。真っ直ぐに王都へという旅程となった。

「準備はいいか？」

家を全員が出たのを見たマルスさんが、確認の為に声をあげる。それに頷きや拳手で返すのを見たマルスさんが、それでは行くかという声と共に馬車へと向かう。

其の背を追うように僕も歩き出し、荷物を全て積み終えると昨日まで時間を共にした、短い付き合いであった其の家に

「行つてきます！」

と声を掛け。くるりと振り返ると、差し出されていた手に？まって馬車に乗り込み。

動き始めた其の揺れに、まだ見ぬ街との出会いを思い描いた。

第10話　今はまだ舞台裏

この大陸において二大国の一翼となるネスカ王国は、一昔前まで続いたローエム帝国の苛烈なまでの武力による領土拡張への警戒として、其の城壁は勿論、城塞という威容となった王城、さらにはより一層と高く、頑丈に隙なく囲うように王都の外縁に石壁を組むことにより、それを一目見ただけでこれに挑むことの無謀を心に植えつける程の様相を築き上げていた。

その備えは何も建物だけではなく、兵に対しても万全を期するべく。

ローエム帝国の領土拡張も、代わりと共に沈静化し、それに伴いネスカの軍備拡張も停滞から縮小へと移行しつつあるものの、その訓練内容には少しも緩みは存在せず、未だ強国としての存在感を堅持していた。

王城の門扉にて警護する様に直立不動にその日の任に当たっていた一人の青年。ここ最近は何やら不穏な問題が各地で発生しているらしく、様々な地方からの情報を携えた早馬が到着しては王城へと吸い込まれていく光景に、さて今日はどのくらいだろうかとぼんやり考えていた時である。

微かな足音が聞こえて其方へと振り向くと、何時の間にかすぐ側まで近づいたのか、怪しい人影が此方へと歩んでいた。元は茶の口ブであったのか、それは酷く汚れ、所々に元の色を残すのみで、顔を見ようにもすっぱりとローブに覆われた其処に視線を向けても其の表情は伺えない。

一言で言い表すなら、怪しい。

この近辺には王城しか、ない。何処かへ向かう途中に通るような場所でもなく、ならばここに居る理由は王城へ向かっているということになる。しかし、明らかに平民よりも異質な装いの人物に、警戒無く対処出来ようはずはない。

腰に佩いた剣に手を伸ばし、それから誰何の声を向けるべきか。

そう考え手を動かそうとした時、それまでは微かにしか聞こえなかった足音が耳に響いた。

トン

王城の中に在って一際開けた場所であり、数々の案件の集まる場所。人の胴回りよりも太い柱が幾筋も均等に聳え、其の空間の中心には、朱の絨毯が真っ直ぐに伸びる。その朱の道は豪壮な作りの扉から始まり、八段ある広々とした階段を経て、誰彼が座することの無い、一人の主にしか座ること遠敷る去れない威容を誇る椅子の足元まで続いている。

その壇上。この日もまた告げられた報告を受け、其の椅子へと腰

掛け、此れまでに集まる情報を元にそれに対する対処に対する緊急の召集の元、集まる面々へと視線を向ける。

重臣、近場の領主、エクセザ軍軍団長、近衛師団長や各騎士団団長等。

そして、行き成り扉を開け放って現われた、酷く汚れたローブを身にまとい、門衛の背に付き従うというよりは、まるで不可視の糸で操っているかのようにしながらに歩く、怪しい人物へ、と。

周囲は当然のようにざわつき、警戒を表し、途端に殺気走るような喧騒が飛び交う。

そんな中にあっても悠然とした歩みは止まることなく、少し、また少しと歩を進める。

シャリン、と澄んだ音を耳にし、それが鞘走りの音だと気がついた時には、一つの影が動いていた。

それに対し、気にする風もなく歩みを進めるその人物、の前を歩く門衛が

「殺意を抱いている者」

と、すこしくぐもった声を発し、その後ろを歩む人物が、一歩、脚を踏み出した。

トン

と、まるで絨毯の上を歩いているような響きのその足音の後、『ドサリ』と複数の音が周囲で響く。ついで聞こえた奇声に、向けられた視線の先には、喉を押さえて苦悶にのたうつ騎士の面々の姿。

「倒れた者を見、救護の念を抱かなかった者」

更に一步。それだけで、この広い空間は静寂に包まれた。そこでようやく、其の人物は歩みを止めた。

「このような形で突然の訪問、どうぞ御寛恕いただきたい。何分、急を要する次第であり、少しばかり強行な手段をとらせて頂いきました」

と、優雅に一礼し、再びその上体を伸ばす。

「今立っているものは、七名ですか。ああ、国王陛下も入れますれば八名。ここはよい国なのでしょうな」

そう言い、それから一步、足音を響かせた後には、その場は静寂に支配された。

「これよりの会合は全て極秘とさせて頂きたく、この場において国王陛下と私以外のものには、眠っていただきました。此方の都合でございますが、其の点どうかお許しを」

許すも許さないも、対抗する手段が皆無である以上、そしてこれだけのことを片手間に出来るといふ人物を相手に、異の唱えようも無いという思いしか無い。

それでも、其の言動から取れる態度には、王政という物に対する理解があり、其の上で自分よりも王のほうが権威を持っているとした言動を元にされているのが分かる。

ならば、自分に求められているのが何かを知るべく数ある疑問に答えてもらうようにするべきだと思い、心の中に巢食う恐怖をひたすらに押しとどめ、頼む声よ震えてくれるなと願いながらに相対す

るその人物への対応へと思考を切り替えた。

「して、そこまで急ぎで此处まで来た理由とは？」

「はい。それは当然の疑問です。ご存知とは思いますが、ここ最近、身元不明の人物が、各地で見かけられた、という報告が集められていると思いますが、それに関する話で参った次第です」

「そなたに関係する物であるか？」

「はい、私も其の一人にありますれば。ゲーム・マスターの望みは分かりませんが、それに因って集められた内の一人が私ということですよ」

「ゲーム、マスター？」

「ああ、そうですね、どういいますか…この世界において、天上の者に等しいお方の名称はどのように？」

次々に飛び出る其の言葉には、聞き覚えの無い物が含まれ、より一層問題が複雑化していくように思われた。とはいえ、それは自分が理解できない、できていないだけであり、それが解りさえすれば核心に近づくという物であるということだけは理解していた。

「それは…神、ということであろうか？」

天上神、創造主、雲上人、名称は数あれど、其の世界にありて唯一絶対と謳われる存在。

この世界においてはただ”神”と呼ばれているのですね、と呟いた其の人物は、次いで一つ願いを聞いて戴きたい、と告げた。

「神の座す場所、それに纏わる伝承。古に謡われる神歌や民謡等、それに詳しい物やそれに興味を持つ者を紹介頂きたいのですが」

そう言い、言葉を切る。その言葉に、即座に浮かんだ人物を思い描き、頭を抱えたくなる。確かにそれらに纏わる物も集め、其の好奇心から数多くの伝承、またはその情報に対する手掛かりのありそうな場所すらも数多く知っている。其の上で王家にのみ残る歴史の裏事情にも興味を持ち、其の普段は嫌がる自身の立ち居地を余すことなく利用しては其の好奇心のままに歩む一人の人物。

「其の物に害をなすことは無いと約束して貰えるなら」

それまでに滲んでいた恐怖や畏怖が何処へという雰囲気の国王の態度には、ある種の覚悟や決意を孕む、しかし国王という言葉が似つかわしい、堂々としたそれに戻っていた。

「この身に掛けて。其の願いを聞き入れて頂けるならば、私は友誼を持ってこの国に、この国の王に助力致しますよう」

其の言葉にある、この力に対する魅力よりも、先の約束に対する肯定の返答に、国王は安堵の息も漏らす。しかし、次いで擡げた感情は、其の人物が問題を起こさないかどうかという不安だった。

とはいえ、ここまで進んだ話に、今更適当な人物が思い起こされることも無く。

「マクスハイム・オウル・エステシア・ネスカ。この国の第三王子にして、我が息子だ」

其の言葉に対する返答は、幾分楽しそうな響きを帯びた声と、定

例句じみた門衛の声による礼の言葉。続いてこの場を辞する言葉を述べると、其の人物は扉へと向けて歩み。

扉を出、その扉が閉まる直前。一度足音を響かせた直後に閉じられた扉の内では、先ほど迄の静寂を守っていた者達が、ゆっくりとその空間に活気を戻し始めるように動き出していた。

「誰だ？」

ノックに次いで入室の許可を求める声に、まるで興味も感じられない声を発した部屋の主は、次いで述べられた言葉に機嫌を悪くした。

「マクスハイム・オウル・エステア・ネス力殿下でいらつしやいますか？ 話をしたく参りました」

「そんな長つたらしい名前で呼ぶような奴と話す事などないと常日頃から俺は言っているはずなんだが。他所者か？ お前は。それと俺を殿下と呼ぶな。それが相応しいの兄上達だけだ」

「……ずいぶん面白いお方ですね。わかりました、その言に従いたく。私は何とお呼びすれば話し合いに応じて頂けるのでしょうか？」

「マクスでいい。入室を許可する。入れ」

そうして現われたのは、門衛と、その背後に酷く汚れたローブで

全身を覆う怪しい人物。

しかし、マクスというこの青年は、それを眼にしても微動だにすることなく、難しい顔をしたままに視線を二人に向けたままだった。

「それで、話とはなんだ？ その門衛の男はどうしたんだ？ それと、お前の名は？」

「そうですね。この青年には、此方の言葉を話して頂くために協力して貰っております。ここまでで私の話とはどんなものか予想がつくのでは？ それで名前ですね。私はデパージトリイ。ディーともお呼びいただければ」

「確認する。その門衛を介さず、俺に直接触れることでその男を解放することはできるのか？」

「いやはや、あなたには恐怖という物がないのですか？ 自分で言うのも何ではありますが、見るからに怪しい者に対し、そのような言動は王族の血を引くものとしてはいささか危険に対する認識が緩いと思われますが」

「上二人の兄が優秀である以上、俺など何時死んでも問題などない。むしろ死んだほうが後顧の憂いも消えよう。それなら好きに生きるだけだ。ディー、お前が此処に来たのも父王に会った後なのだろう？ ならば父王がそれを望んで現われたと考えてもいい。まあ話し合いということらしいが」

「…興味深いというか、ええ私はあなたのような方は好きですね。それで、この青年の解放を所望ということでしたね。解りました、その言に従いましょう」

その言葉の後、扉を開け外に出る。そうして戻ってきたときには、そこには一人の人物、デイーだけとなっていた。デイーが近寄るのを動じることなく見たままに、目の前でそつと跪き、右手を差し出されるのを見、それに数瞬考えるような視線をくれた後に、マクスはその手に自分の手を重ねた。

「マクス様には威風がお在りですね。よき跡継ぎに恵まれた国となれば、国民もまた幸せでしょう」

「俺が跡を？ それは無い。兄上達の方が断然相応しい。それで？ そんな話をしたいのか？ それならもう用はない」

マクスの言葉に、返された言葉は先程のそれ。この世界において残されている、神の座す場所、それに纏わる伝承。古に謡われる神歌や民謡、その上でこの世界の歴史と、王族にのみ秘された伝承。それを聞いたマクスの表情には、どこか納得したような表情が浮かんでいた。

「条件がある。ただで教えられる物じゃないのでな。どうもお前は今回の騒動について色々詳しいみたいだな。それを教える。嫌ならそれでいい。自分で探るまでだ」

「成程、提供ではなく交換でなければこの話は無し、と？ 私としてはそれで構いませんよ」

「そうか。ならこちらが話すのは先程聞いた事だな。ならお前にはこの問題の要点、神について知っていることを全て話してもらう」

「...どうしてそこがこの騒動の要点と？」

「流れで解るだろ？ それともそんな事に気がつかない奴に見えたか？ それで、知っているのか？」

「…知ってはいます。とはいえ、この世界とは別の、と付きませんがしかし、これは唯人が知っていていいものでもない……何故それを知ろうと？」

「好奇心だ。それ以外はない」

解りやすいというか。そんな苦笑に似た響きに、しかし反応は何も無い。それはそんな反応をどうでもいいというよりは、むしろ慣れてしまったというだけの理由ではあるが。

「ではこうしましょうか。あなたの元に集まるプレイヤーの数に応じ、その都度それらの情報を開示しましょう。此度の騒動にどれ程集められたかは解りませんが、そのもの達の中には元の場所へと願う者も居るでしょう。そうになると、過去に同じことがあったのか、そして在ったとしてその後どうなったのかと考える者が現われるでしょう。そしてその情報が一番集まる場所と考えたとき、目指すべき場所の一つがこの王城でしょう」

「プレイヤー？ 何だそれは？ …交換条件か、まあいい。だがそれは自身の勢力として引き込めということか？」

「大雑把にはその解釈でよろしいでしょう。私としても、自分の足で探すべきなのですが、この世界は中々に広い。未だ未開の地も在るとなれば、耳目、手足は多いに越したことは無いということですか」

「そういうことか。俺の元に情報を集まるようにしたい、と」

そのための協力も惜しまない、というディーの言葉に、マクスは了承の言葉と共に頷いた。その後、ならば即座に此れまでの問題に對し、未だ対処のされていない数件の問題を自分の下へと届けられるように、また今後同類の問題の届け先も自分の下へ届けるようにと手配に動く。

そうして集めた各地の報告書類の中、エクセで保護という名で三人の人物を預かっているという人物の名を眼にし、マクスは急ぎ筆を執ると、書き終えたそれを大至急で届けろと言い渡し、さて久しぶりの再会となるが、あいつがこの話を聞くとどんな顔をするだろうか？ と、それを考えて笑みを浮かべた。

第11話 はじまりは離島から（前書き）

視点が変わります。

第11話　はじまりは離島から

眼を覚まして最初に目に映ったものは、もともと揺れる見たことも無い灰色の毛並み。その間に小さく光る茶の煌きに、どこことなく探る様な動きが見えた。忙しなく揺れるその煌く茶の色に、それに合わせて小刻みに揺れる灰色を見ると、それが未知の物に対する警戒心よりも、このまま暫く眺めていたいという気持ちを思わせた。

暫くそのままにしていると、興味を失ったのか、揺れる茶の煌きを翻し、のそりのそりと灰色の毛皮を揺らしながら、どこことなくのんびりという形容を思い浮かべる足取りで、それは何処かへと去っていった。

あれはなんだったのだろうか？と思いつつも、投げ出されたかのように地に横たえられた体を起こす。

周囲を見ると、牧歌的な印象を受ける。遠くに見える柵、それに仕切られた内側は草が生い茂り、その柵を越えて向こうは未開の、というように鬱蒼とした木々が見える。

其の柵の内には、先程見た灰色の毛を持つ未知の獣と、それより一回り大きいやや黄色がかった白の毛を持つ獣が、のんびりと草を食んでいた。

長閑な所だな。

そう思い、目を細めてその光景を眺めながら、自分の現状を整理し始める。

見たところ何処にも怪我の類も、ましてや争った形跡すらない。

ゆつくりと立ち上がり、手に足にと力を加えてみたところで、違和感も何も無い。

腰に下げた戦闘武装もそのままにあり、それなのに何の抵抗もなくこんな見たことも無い場所へと連れ去られ、投げ出されている。何かがおかしいとは思いつつも、それが何かが判らない。

ふと鈴の音が聞こえたと思い、思考に沈む意識を浮上すると、草を食んでいたもこもこの獣たちが、のつしのつしと動き始めていた。その向かう先は、先程から鳴る鈴の音に吸い込まれるように一点を向いており、そういえば柵に仕切られていたということを思い出すと、ここにいるのは家畜ということかと其の動きを眺め、ならばそこに人がいるだろうと考えると、其の足は周りの動きに合わせるように其の鈴の音の鳴る方へと吸い寄せられていった。

漸くその音の発信地へと辿り着くと、そこは何とも賑やかな光景だった。先程の灰色にやや黄色の見える白。それが所狭しと密集し、それぞれ思い思いに声を張る。

大人の腰程の背丈を持つその獣の集まる中に立つ一人の少女は、それらに押され引かれと体を揺らしながら、近くに居るものの頭を撫でながら時に怒り、また笑顔を浮かべては鈴を鳴らしていた。

「はじめまして。私はラダのリューサスと申します。すみませんが、お尋ねしたいことがあります」

びくつと肩を震わせ、それから激しい身振りで周囲を伺うように動き始めた少女の姿に、やはり見た目通りの歳の子なのだろう、いきなり話しかけられて怯えるように腰を引けさせていた。

そうして此方へと視線を向けた其の少女は、息を呑むように表情

を硬くしたまま、先程までの自然な雰囲気とは程遠い、強張った姿勢で固まってしまった。

悪いことをしたなとは思いつつも、しかし現状自分の置かれた状況をまず確認しないことには動きようもない以上、この少女か、少女に何方かを紹介して貰うのが一番だろう。

そう考え、膝を折り、右手を地に、左手は背後へと回し、害意はあらず、誠意を持って接することを示すように、少女よりも更に低い位置へと姿勢を下げ、一度頭を下げて礼をした後、先程と同じ言葉、先程よりもうすこし穏やかな口調で述べた。

そうして返事を待つが、獣達はそんなことなどおかまいなしで。

日夜同じような行動をしているためか、少女が何かをすることもないままに、何処かへと歩き始めていた。

それで漸く少女に動きがあり、流れる、というより飲み込まれるように押され、姿勢を崩したと思った後には、一匹の獣の背に仰向けに乗せられ、そのまま何処かへと運び込まれるように消えていくとしていた。

其の光景がひどく滑稽な感じがし、口元に笑みが浮かぶが、それは少女に見せるべきではないかな？と考え、こんな生活も悪くないと思いつつも、さてこの流れに着いていたら少女の親か、村人か話の出来そうな人は居るだろうか？と、そんなことを考えながら、灰色のと白色の流れに速度を合わせて歩き始めた。

「リユー！オハヨー！」

「オハヨウ、リン」

差し込む朝日に目を細め、ようやく馴染み始めたのか、自然とでた言葉は、此方の朝の挨拶の言葉。

それに頷いて近づく少女は、それを告げるとまた元気に走って消えていく。きつとモル達の世話に行くのだろうと、其の手に握られ、走るたびに鳴り響く音に、今日も素晴らしい日を送れますように、と呟くと、さて朝食の手伝いにもと歩き始めた。

はじめは戸惑いの連続だった。

モル、と呼ばれるその家畜に付いて辿り着いた所は、木で作られた大きな厩舎。そこからやや離れたところに見えた家のまえ、柵に使っていた様な木の加工をしているのか、少女の祖父と見られる外見をした男性が居た。

戸惑いながらも此方へと向けられた言葉は、まるで聞いたことの無い言葉だった。それはあちらも同じようで、その後の遣り取りは身振り手振り、または地面へ書き込む絵による、推測でしか伺えない情報交換だった。

とはいえ、そのままでは困るだろうと思ったのだろう、この家のお世話になることを承諾してくれたため、ならば自分も出来ることは手伝おうかと、食事の手伝いから力仕事の数々を進んで引き受けることにしていた。

そうして徐々に打ち解け始めてくると、やはり言葉による遣り取りの必然性が要度を増し始めてくる。

最初こそ名前と身振り手振りでの遣り取りしかできなかったものだが、それからその男性に空いた時間にこちらの言葉と文字を教えて貰い。今ではある程度ではあるが、簡単な単語を交えての会話ができるようになっていた。

そうして現在。寝起きに自然と此方の言葉を言えるようになったのは、ここに来て十五の夜を越えた頃であった。

「リユーサス、やはり、大陸に、いくか？」

その日の夜、リンが寝たのを確認した後、祖父のセラマさんが二人だけで話しをしたい、と持ちかけてきた。

其の手には一通の手紙が握られており、その内容を教えてくれた。それは、私と同じように、何処からともなく現われたような知らない言葉を話す者が各地で見つかっているそうだ、ということと、それについての情報を集めているという、一国の王子について。

セラマさんの弟が大陸に移住しているそうで、私のことを案じてか、それとなく大陸の方で何かないか聞いておいて欲しいと頼んでいたらしい。

大陸、と呼ばれる広大な地には、ネス力王国とローエム帝国という二大国があるらしい。

ここはその大陸より船で半日という所にある小さな島で、住人も然程多くない。島全体を見ていないが、見かけただけでも二十人にも上るかどうか。

「はい。私は、知りたい」

そして、思う。その現われた者というのが、自分と同じ場所から来たのかどうか。そうだとしたら、きっと同じ思いをしたのだろう。自分は心優しい人に出会えた。同じような人も沢山いるかもしれない。

だが、もしも。そう考えると、やはりこのまま此処にという考えにはなれないでいる。

そんな私を見たセラマさんは、深く、重い溜息をゆっくりと吐き出す

「明日、昼、大陸へ、船、戻る。リユーサス、乗る。私、頼む」

セラマさんはそう告げると、今日はもう寝なさい、という言葉を残して、其の手紙を持って家から出て行った。其の背に感謝の念を込め頭を垂れ、戸の閉まる音が聞こえ静寂を暫く続いた後、ゆっくりと体を起こし始めると、明日か、と呟いてからリユーサスは最後に出来ることはないかと考えながら歩き始めた。

陽も昇り、船着場に数名の人影が忙しく動き始めた頃。

慌しい足音にリユーサスが振り返ると、泣きそうに顔を歪めたりンが一心不乱に此方へと近づいてくる姿が見えた。其の右手に握られているものを目にし、自分の贈り物に気がついて貰えたことに安堵しつつも、急な旅立ちを詫びる為の言葉も覚束ない自身に情けなさを感じつつ、ボスンと腹の辺りに生じた重さに、其の原因たる頭に手を乗せ、優しく撫でる。

「リユー！行く！やだ！」

泣き声のままに叫ばれるそれに、しかし答えてやれることができず、謝罪をこめるようにその頭を撫でてやる。そうして、未だリンの右手に握られたままの贈り物に目を向けると、しゃがみこんで其の手に自身の手を重ねる。

視線の高さが揃ったことで、正面から向けられる視線にどう返したらいいか直ぐに思い浮かぶことは泣く、ごまかすように其の手に握られた物を手に取ると、それを、今まで自分が使っていた首飾りを、リンの首へと掛けてあげる。

「また、来る？」

それから向けられた顔には、何かを我慢するようにした、幼い顔。辛い思いをさせている自分を激しく罵りたい気持ちを抑え、其の言葉に大きく頷いてみせる。

「また、来る。約束」

其の言葉と同時に、叩かれた肩に振り返ると、一人の男性が船の方を指差していた。

時間か、と思うと、もう一度約束、とリンに笑顔を向けて、船の方へと歩き始めた。

離れ始める島の姿に、此れまでの思い出が次々と思い起こされ、幸せな気分で過ごした船旅も、次第に視界で其の姿を大きくさせ始める目的地を前にすると、これからのことへと思考は切り替わって行く。

まず目指すべきは、『ネスカの王子』の居る場所。それと共に此方の言葉をもつと覚えなないといけないだろう。それから同じように言葉の通じないという人物の搜索。長旅となるかもしれない、その準備もと考え始めるときりがない。

そうして、ふと思いつくのは、望郷の念。懐かしくも暖かいその光景は、しかし当分見ることも叶わない世界となり、だからこそより一層その念は募る。

もうすぐ着くという声に意識を切り替え、視線を上げた先には、これから過ごすことになるだろう巨大な大陸という名の未知の世界。すっと目を細めて振り返る。いつかまた、必ず訪れることを誓ったあの島を思い、それから、今後また幸せな日々を過ごすことを

願い。

揺れの収まった船に、船頭に感謝の言葉を告げると、リユーサスはその一步を踏み出すのだった。

セラムさんに聞いたとおり、暫く足を進めると、前方に街影がうつすらと見え始め、傾き始めた日の具合を確認し、暮れる前に街まで辿り着くには少し急いだほうがよさそうかなと、大きく足を振る直前。

肩にかけられた手に振り返ると、見知らぬ男性が其処にいた。ここにいるということは、一緒に船に乗っていた人か、その人からあちらの島の便りを受け取るために、船着場に居た人だろう。知らないということは、後者で間違いはない。船で共に来た人数など自分を入れて四人。そのくらいの見間違いはしないだろう。

「あんたも街までか？なら一緒にいかねえか？」

何故自分に声を掛けたのかわからず、それでも頷いて見せると、街に着くまでの暇つぶしに色々話でもしよう、と言う言葉の後、島の様子はどうかと聞かれた。

ああ、それが聞きたくて声を掛けてきたのかと頷くと、これも会話の練習になるだろうとそれまでの生活でのことを話し始める。

この男性はどうも商人として、あの島の数軒と取引しているらしく、其の中にはセラムさんの家も含まれているという。あそこのモルの毛での仕立て品は買い手がかなりの数居るらしく、今年の状態を気にしていた、ということらしい。

そんな話をしている間に、気がつくと街の目の前まで辿り着いて

いた。

辿り着いたはいい物の、さて何処へいこうかと視線を左右させていると

「この後どうすんだ？ 街の中もわからんなら…この時間なら飯屋か？ 腹も減っただろ？ とりあえずそこで行くか。街のことをもう少し詳しく教えてやるよ」

と、そんな自分の様子に助け舟を出してくれた。日も暮れ始めている現状、下手に一人で歩き回って不審者とみられて騒ぎになるのもどうかと思うし、折角の好意でもある。

リユースはそれに感謝の言葉を返し、こっちだという声と共に向けられた背を追い始めた。

第12話 フレリアのとある街

「この大陸の歴史が知りたい？ 変わったものに興味持ってたんだな？ つつても、俺もそんなにはしらねえぜ？ 西にはいかねえから。まあ、知ってることだけな」

それから語られた話の内容は、このような物だった。

初めのころはやはり未開の土地も多く、それこそ手探りで探求、調査からの拠点起し。其の都度水場の有無から近場の安全性、生態系の把握と其の全てを調べていくともなると、途方も無い時間と労力が必要とされるため、其の拠点となるべき場所は徐々に規模を増し、簡易的な村と呼べる規模へと発達していく。

そうなると人も集まり、またそれに伴う生活も向上し、更に探索の為の手も増え、其の未開の地へとさまざまな物を求める人が増え始めてくる。

ある商人は其の地で得うる利権を先駆けるように、ある罪人は其の地に逃亡のねぐらを求め、ある学問者は未知への興味で、ある農民はその植生に対する期待で。

それは漁村となり、農村となり、それから商業地となり、さらには街が起こり。次第に露になるその地の姿に、人々の気力は衰えることなく次を求めて前へと向かう。

そうして、それが所謂ひと段落を見せ始めると、やはり人の中には違ふ方へとその視線を向け始める物が現われる。

先に何があるのか解らない場所へ労力を向けるよりも。

そうして始まったのが、権力の台頭。近場の村や街を併吞し、其の頂点に座す一人を目指す。武力を持つてはじめられたそれは、次第に噂として流れ、それに対抗するためにとまた数々の村や街が次第に纏まりを見せ始める。

其の激動の時代と言える長い期間、様々な利害を振りまきながらに漸く落ち着いたころには、そこには八つの国という形での収束を遂げていた。

その内の二国が現在あるローエム帝国の前身であり、其の当時の国力としては三番手になるかどうかという程度でしかない国であったという。

未だ近隣諸国との争いは絶えず、常に腹の探りあいをしながらも、しかし民としては食うために取引をせねば生きて行けぬため、様々な事柄に神経をすり減らしながらの睨み合いの中。

今より五代前、ギリエムの王子と、隣国のローランの王子はどこかしら馬が合ったらしく、共に居ることが多く見かけられ、其の都度夢物語のごとくひとつのことを熱く語り合っていた。

八国の統一。

未だ未開の地の残るこの地にて、このまま疲弊していくのは馬鹿げている、という思い。

それとは別に、あの森の向こう、巨大な二大国、ネスカとシリィゲンの介入が始まることに対する懸念。

両者の内にあるものは別では在るが、目指す先が同じであること

からか、二人は互いに遠くない未来、そこで共に夢を追わんと約束を交わす。

そうして数年後。その覇業が開始される。

過去に侵略され、または侵略をしてとその地に残される禍根は侵略をした側に見れば、そこにいるものに向けられる物など軽蔑に似た弱者に見せる優越意識となり、逆の者なら憤怒や憎悪と言った物が多いだろう。

とはいえ、その感情だけが目立つわけでもない。自身の置かれる地にて、その頂点が暗愚であれば、侵略される、という感情よりもすぐ変わる頂点に幾許かの期待を向ける者もいる。

この二人は、其の点を真っ先に考慮した。そして真っ先に向かったのが元が大きな商業地として栄えた一国。金に物を言わせていたのが贅沢の限りの物だけで、およそ防備に対する警戒が薄い。

対応できて二方面の防衛、それ以上の戦力を持たないそこには、統制された軍というものがなく、ただ金で其の都度徴兵するだけというお粗末なまでの意識しかなく。

あっさり、とまでは行かずとも、予想したほどの被害も受けずに終わった初の侵攻を勝利で飾った二人は、そこで残る五国へと宣言をする。

其の地の統一を旨に、進撃を開始することを。

これより先、自国の名をローエム帝国とする、と。

そうして戦乱の時代を迎えた其の地は、代が変わり、また次の代へと変わる毎に其の版図を一国の色へと変えていった。

「でまあ、今残ってるのがこのフレリアとローエム帝国だけになったわけだ」

簡単に説明するとこんなところか、と話疲れたのかその男性は重い息を吐くと、飲む物でも頼んでくるといつて椅子から立ち上がり、テーブルを後にした。

建国というのはやはり争いの歴史なんだなと思いつつ、リユーサスは故郷のことを思い浮かべて神妙にうなずいていた。結局振り回されるのは民であるが、しかし暴政に耐えるだけの日々よりはその戦争の先に期待を込めたいという思いもあるのかもしれない。

しかし、逆の場合もあるのだ。善政を前に立ちはだかる侵略という名の暴威は、何物にも増して許しがたい。

それに傷つき心を痛める頭首の顔を思い出し、しかし、先程の統一物語に何処か羨望を覚えている自分に対して、座りの悪い思いで毀れた溜息と同時に、再び響いた足音に視線を振ると、木のジョッキを二つ手に戻ってきたその男性が、其のひとつを目の前に差し出したのを見て取り、感謝の言葉と共にそれを受け取った。

「どこまで話たっけな。と、東の、こつちのことは終わったな。で、残る西の方は、俺も詳しくはわからん。まあ、ネスカとシリーゲンってでかい国があつて、シリーゲンの方が王族の後継問題でいろいろあつたらしいんだよな。その時というのがローエム帝国の全盛期。国力旺盛の、残すところフレリアとダラム。あとは未開の地だけって時だった。統一目前の状況で、次に向く矛先は何処かということから、自然ネスカを頼る形での併合だったらしい」

ずいぶんあっさりした物だとおもいつつも、ローエム帝国のその規模の大きさを聞く限りでは、それも自然の帰結かもしれないと思っていた。

しかし、それだからこころ考えるのが、フレリアの立ち居地だ。現状ネスカ王国とローエム帝国のほぼ中間にあり、そのどちらにも組せず、それでいて未だ侵攻の目に見受けられないこの地は、両国に

取ってはどの様に移っているのだろうか。

「まあ…そう考えるのが普通だよな。この国は其の戦乱の時代、一度滅んでるんだ。その理由は意図的に伏せられてはいるが…まあ碌でもないことをしたってわけだ。それから忌み地とされてきたわけだが、その影響かここはその時、ちょっとした空白地帯となつたわけだ。

で、戦乱の世に、そこに逃れてきた者が集まって、気がついたら大所帯となっていた。歴史も浅い、曰く付きの土地柄ゆえ、特に目ばしい物もない。それに、下手に刺激して隣国を刺激しないようにと、どっちからも放置されている」

ずいぶんと奇妙な立ち居地だと思いつつも、この地に住むことを決めた人々の逞しさに感嘆の念を抱いた。

戦乱を逃れるためとはいえ、亡国の地にて单身暮らすのはかなり過酷であることは容易に想像がつく。治安の整備も期待できず、旅の商人が足を止めることも期待できず。何を持って生活を維持するかというそれを自分で見つけることから始めなければならないとすれば、例え戦を回避できたとはいえ、そこに辿り着くだけの苦労にもまして、より一層の困難を其の身に感じられたのではないだろうか。

そんなつぶやきがもれたのだろう。男性はにやりと口元を歪めると、ずずいと身を乗り出す。

「俺らの先祖は開拓民だぜ？そんならこれしき問題ない。それに何時でもそうだし、何処でもそうだが、商人つてのは、遅いもんだ。どんな状況だろうが、儲けになるとわかりやそこに食い込むのは当然だ」

そのうちの一人が俺の家系だと、どこか誇らしげに締めくくった。

その後、其の男性は仕事の話があるということとその場から消え、それに感謝の言葉を述べて見送った後、特に何処かに用があるでも無し、これからどうするかを考える。

リユーサスは先程聞いた話を振り返りながらも、やはり何処にも手掛かりらしき物が感じられないことに、ネスカ王国へ向かうのが一番なのだろうということを考え始めていた。

唯一何かを感じさせた物といえば、亡国の時のこと。とはいえそれについてもその内容は伏せられ、この地に残されていないというのなら、歴史のある国へ向かうのが妥当だろうと考える。

やはり自分のような人間の情報を集めているというネスカ王国の王子という者の元へ向かうのが一番の近道になるか、とそう考えた。

そうになると、先ず第一に必要なのが旅の協力者ということになる。フレリアはその成り立ちからか、ローエムと同じ言語が一般的に使われている。しかし、話に聞いたところ、ネスカ王国はまた別の歴史があり、だからこそそちらはそちらで独自の言語が発達し、それが定着しているということである。

ようやく会話らしいものが出来るようになったばかりのリユーサスとしては、そこからまたもう一つの言語を勉強し、それからの行動となると、動けるようになるのがどれ程となるか考えるだけで途方に暮れる思いになった。

そんな時に聞いたのが、旅商人の話だった。

商人の中には其のどちらの言葉も覚えている者が多く、またその為、両国間の移動に際し、橋渡しを承諾する者も少なからず居るといふ話を耳にした。

だが、そこで問題となるのが自身の証明ということになり、結局はまた振り出しに戻る事となったのだが。

先の見えない思考に焦らされる様に様々なことを考えてみるも、これといった物が浮かぶはずもなく、しかし無常にも過ぎ去る時間に頭を抱えていた時のこと。ふと差した影に顔を上げてみると、呆れたような、驚いたような、それでいて見知った顔がこちらを見つめていた。それが誰かを見てとったりユーサスもそれに返せる言葉も湧かず、困ったような笑みを返すだけとなった。

「ネスカに行きたい、か…まあ、確かに今の状況じゃ厳しいな。知ってるだろ？何処から来たかわからん奴が各地で見つかってるって」

「ええ、聞いたこともない、言葉を話すそうですね」

自分がそうだというのは伏せ、話には相槌をうつに留める。語られた言葉から其の先はわかったものの、だとしたら尚更にネスカ王国へ渡る為の条件が厳しくなっているのを悟る。

「商人だろうが、下手すると関所止まりだ。そこで物品交換が関の山。てなわけで商人を当たるってのは意味がないだろう。

可能性が有るとしたら、王族の特使くらいだろうな。それだとて王様への綱渡しやら何やら考えたところで、時間もかかるし割りも合わないだろう。ほとぼりが冷めるまで待つのが無難なんだろうが…急ぎなのか？」

此方の身を案じてくれてだろうが、そうして向けられる声や態度は、真剣なものであった。

それをありがたく思いつつも、自身にはその思いに返せるだけの何も無いことを思い、悔やむと同時に、しかし出来るだけ急ぎたいということを告げる。

それを聞いた男性は、考えるようにしながらも此方を上から下へと眺め回す。その後、伝えるべきかと悩むそぶりを見せつつ、それからもう一度視線を上から下へと滑らせる。

「一つだけ、あるにはあるんだが……危険でもあるし、好き好んで選ぶ奴も居ない道だ。だが、だからこそ誰もそこを通って来たと考える奴も居ないし、警備すらされていない」

そう言っ て話し始めた内容は、山越えという提案だった。

鬱蒼とした木々が茂る、それなりの標高を持つその山は、見ただけでも迷い込んだら終わりだという程に不気味な気配を漂わせ、だからこそ誰もそこに脚を踏み入れようと思う者は少ない場所だという。

それでも全くの未開という訳でもなく、入り口程度の距離ならばその地理を知る者は多少おり、そこにしかない珍しい植生を生活の糧にするものも居るそうだ。

そうして何時ものごとくその日も足を踏み入れたある日、一人の男がほうほうの体で彷徨っているのを見かけたという。話しかけて返ってきた言葉に、山を越えてきたのかと其の人物は驚いたという。

「山賊の類は？」

「誰も通らないあそこにか？むしろ野生の獣、方向感覚、先の見えない行程。心配するならそっちだろうな。まるっきり情報がない」

リユースはそれに頷き、それからまた表情を曇らせる。

山越えというのには、全く問題はないと考えていた。自身の故郷もまたそのような地にあり、そこで得た知識というものに自信もある。

しかし、山を越えた後のことも考えなければいけない。

そう、言語が違うということが問題として残るのだ。自分ひとりでの山越えなら問題はないが、誰も近寄らないというそこへ、共に足を踏み入れてくれる者などいないのではということだ。その表情の変化や考える仕草に、ふと水を向けられ、それを口にすると、呆れられたような溜息が聞こえた。

「山越えだけでも問題だろうに……まあ大丈夫だというのなら、なんとも信じがたいことだが、今はいいでしょう。そうになると、山越えの後の問題を片付けるか。

俺には兄弟が五人いる。俺は三番目で、俺の一つ上の兄が、ネスカで商人やってるんだ。今から手紙を送ったとして、それでも届くまでつてなると数日は掛かるだろうな。まあ事情を説明すりやある程度は手伝ってもらえるだろ」

そういうや、それならば先ずは、とテーブルの上で指を動かし、何かを書く動作だけで簡単に説明する、と告げながら山越えの為の道を教えてくれた。それからこの街で旅装を調えるなら、食料はここで、衣服はここだと店の場所なども説明しはじめる。

それを忘れないようにと頷きながら片端から頭に詰め込む。

「山を越えてしばらく歩くと、小さな農村がある。村の規模は小さいが、まあすぐ見つかるだろ。うちの兄には其処で待っていて貰うように書いておこう。それで、そうだな、ちよつとまで」

そついい、懐から何かを取り出すと、店主の下へと歩いて行き、そこで書く物を借り受けるとなによりやすらと手を動かして書き込み、それが終わるとこちらへと戻ってきた。

「此れを見せればいい。難しくないことなら手も貸してくれるだろう」

「ありがとうございます。しかし、ここまでして貰っていいのでしょうか？ 私には何も返せる物もないのですが…」

「……どういえばいいかな。セラマおじは知っているんだよね？」

「ええ、大変お世話になりました」

「俺はその親戚筋になるんだよ。だからこそ取引先として優遇もされてる。で、あの人から出来ることでいいから、もし手伝えることがあったらその力になっては貰えないか、という手紙をね」

それから暫く感慨にふけっていると、日も暮れ夜の帳も降り始めていたため、仕事明けの人々で辺りが騒々しくなりはじめる。運ばれる料理に混じって漂うアルコールのおいに、そろそろこの場から退散するべきという言葉に頷いき、二人はその場を後にした。

また明日の昼にここだと約束をし、其の男性とリユースはそこで別れた。

第13話　これから

僕が話し終わると、三人共静かに、考え込むように瞑目し、動きを止める。

暫くこのままなのかなと視線を左右させ。それから長く話したためによる喉に渴きを覚え、飲み水を持つてきますと断わりを入れて食堂に向かう。

居間へと戻り、テーブルに近づくと其々の目の前に水の入ったコップを置き、先ほどまで座っていた所へと自分も座る。

「それで、マルスさん。先ほどの話と、昨日言っていた『手掛かり』と、どう繋がるというの？」

それまでの静寂を破ったのは、そんなエリーセさんの言葉だった。

「　こんな命に惜しみなど　唯の一つもありはしない　願いが一つ叶うなら　全てを捨てて我は行く」

呟く様なひっそりとした音声。それでいてしっかりと耳に残る、まるで詩のような響きのそれに、それを声に乗せたマルスさんは、未だ瞑目したまま考えるように俯いていた。

それからすつと顔を起すと、引き締まった表情を乗せ、何かを決意したように口を開く。

「先の詩は、古い伝承に残る、俺が知る数少ない『ロスト』に纏わるものだ。それがどんなもので、何処に在って、どのようにして、という記録は世間一般には一切残っては居ない。ただ、『ロスト』を追う者が口々に言っていたと言われていたのが、それらしい。

何処にあるかもわからない物を追い、過酷な旅を覚悟の上、それ

でも叶えたい願いがあるなら、全てを投げ打って追い求めると」

「…ロストへと至る場所、ロストは鍵、其の部屋へと至る扉…運命に逆らう、願いが一つ叶うなら…元の世界へ至る道を探る？…たしかに、僅かながら可能性はありそうね」

「あくまでも、古い伝承だ。一度言ったが、それを求めたが故に昔一つの国が滅んだ。それから緘口令が敷かれ、それまでに残された伝承は悉く闇に消えた。だからこそ何処かで歪んだ伝承として残った可能性もある。ヤトの話からは、あの詩を想起出来る面もあるが、確証には至らない。少しの可能性が残されたただけだな。それだけで過酷かもしれん道を歩むというのみな」

「…とはいえ、手掛かりがそこしかないのなら、他に道もないでしょうけど」

「そう、だな。本筋は『ロスト』の搜索、其の傍らに、『此処ではない何処か』の記録があるかの調査、ということになりそうだな」

盛大な溜息の音とともに、再びの静寂。静かにしながら話を聴いていたけれど、僕には少ししか解らなかった。それでも最後に聞こえた、『ロスト』を追うのが一番いいらしい、というところだけは、なんとなく理解でき、それなら僕も一緒に連れて行って貰えるかな？とそんな風に考えていた。

「なあ、マルスの旦那。少し気になって考えてたんだが……言えないなら言わなくていいが、とりあえず聞いてくれ」

そんな時。ふと、難しい顔をしたマンジおじさんの声が聞こえた。

「この国の情報収集、諜報についてだ。見たところ、情報の遣り取りは手紙かなんかになるだろうが、幾ら急いでも、早馬を越える手段はねえように見える」

「まあ、そうだな。それで？」

「ここに集まる情報ってのは、どの位の範囲までの情報が入る？」

「ここから西に、馬で片道で十日、東のことは王都へと行くな。それがどうした？」

それからぶつぶつと何やら呟くマンジおじさんを、マルスさんは怪訝な表情で見、エリーセさんは、少し緊張したような表情で二人を見ていた。

「あくまで可能性だ。いいか、俺とその姫さん、それに坊主が、ここから西に行った所に三人だ。いいか、ここだけで三人だ（・・・）」

それからマンジおじさんの言葉は尚続いた。

それも、あくまでも大人しく着いていただけで、三人だと。

この世界は、広いんだろ？ だったら、此処以外のどこかにも、同じように俺らみてえなのが現われてもおかしくねえんじゃないのか？ と。

「見つかる前に姿を隠した者。人が居ない山奥に隠棲している者。訳ありなのだと匿われている者。可能性は十分あるわね」

それに顔を顰め、唸るように喉を鳴らしたマルスさんに、さらにエリーセさんも言葉を被せる。

「なあ、旦那。俺はな、元の世界じゃ追われる身だったんで、特に戻りたいという気持ちもねえんだ。だがな、この国の為にかしたって訳でもねえ。」

だが問題はな、そんな追われる身の奴だとか、そんなものも関係なくこっちの世界に来ているってことは、旦那にとっちゃ看過しないことなんじゃねえのかってな」

「…マンジ、感謝する。確かにそれは考えてなかった。いや、この問題さえ片付けばそれでいいとすら思っていた。少し考えれば、いやこの国を思えばこそ広い視野で見なければ成らなかったってのにな」

マンジおじさんはおどけたように肩を竦め、しかたねえさ、と漏らした。

俺はそんな身の上だから、もしもあそこで旦那達に会わなかったら俺はどうしていただろうな、と考えていたと。

それから、表情を改めると、其の可能性があると、何処か情報が集まりやすい場所は？と尋ねる。

「一番集まるとなると、やはり王都だろう。だが、集まるからと言ってそれはそう簡単に耳に入れることはできんだろうが」

「ああ、そうか。姫さんは元の世界に帰りたいんだっけ。なら色々聞ければってことか」

「その姫さんってのは好きではないんですけど。エリーセでいいといっているでしょう?」

「いいじゃねえか、そんなもん」

「…そう、なら私も今日からあなたをゴミとでも呼ぼうかしら？
いいんでしょう？呼ばれ方などどうでも？」

「…いや、いやいやいや。それは人としてどうよ？」

「相手が嫌がろうがどうしようがどうでもいいのでしょうか？」

「はいすいませんごめんなさいぜひとも、是非にともマンジとお呼びくださいエリーセ様」

「…そう」

マンジおじさんがとても小さく見えました。どうもエリーセさんの方が上の方です。

暇つぶしの僕の観察の報告でした。

「聞いてくれ。今すぐに、とはいかんが、王都に向かおうと思う。これから今の話をまとめて、まあ伏せるところは伏せてになるが、調書を書き終えたら王都への出立許可をてつと来ようと思う。

それに関してだが、幾つか決めておこうと思う。

エリーセ、一応魔女という肩書きだけとし、末姫ということは伏せて欲しい。

マンジ、追われる身であったというのはここだけの話ということにする。

ヤト、山の民ということにするが、お前も此処では無い何処から来たということにする。

出立を申請してから、認可が下りるまでは多少時間がかかるだろう。それに一緒に連れて行くとしても協力的である重要参考人物、と言う形になると思う。多少の制限はつくかもしれない。

それでもよければ、一緒に王都へと考えているが、どうする？」

マルスさんの表情は真剣で、しかしその問いにエリーセさんは神妙な表情で、マンジおじさんは少し楽しそうな笑顔を浮かべながらも其の言葉には即座に了承の言葉を告げていた。

それにマルスさんも視線を向けて頷いて見せると、ずっと僕のほうへ顔を向けた。

視線で語られたそれは、「どうする？」と問うようなそれ。

僕の答えなんて決まっている。

だって、まだまだ暫く、皆と一緒に居られると解ったのだから。

「よろしくお願いします」

と元気に下げた僕の頭に、何時ものように大きな手が優しく乗せられた。

第14話 旅立ち

話し合いから二日。出立の認可が取れるまでの間、僕達は旅の準備を始め、この世界についてマルスさんに説明を受けたり、またエリーセさんの魔法、マンジおじさんの腕を見せて貰ったりと、其々に情報を交換しあいながら有意義な時間を過ごしていた。

その日も庭先にてマンジさんの鍛錬を僕はぼーっと見ていると

「マルセイルス・レント・メンシオール様宛の書簡をお預かりしております」

と、そんな言葉が聞こえ、僕は何だろう？とそちらを向くと、マンジおじさんが「旦那を呼んでくればいい」と言ったのでそれに頷き、呼んできますので少しお待ちくださいと言い残してから家の中へと脚を運ぶ。

マルスさんはその人から何かを受け取って、それを眺めて複雑な顔をした。

手に持つそれを開け広げ、何かを眺めると更に複雑な顔になる。何だろう？と近寄ってみても、それにすら気がついていないようにで暫くそれが続いたと思うと、漸く僕に気がついて、「状況が変わった。少し話がある」と僕とマンジおじさんを家の中へと促した。

「明日から王都へ向かう。急な話ですまんが、準備をしてくれ」

そう言つや、引継ぎをどうするか？ 西南方面の巡回準備は、等ぶつぶつ呟き、呆気に取られたままの僕達は丸で視界に入っていないかのようにすたすたと歩き、玄関の閉まる音を残して消えてしま

った。

良くわからないままに、それでも明日にはということなので、それぞれに自分の荷物をまとめ、それから野営に使う物やら食料やらをまとめていく。

準備が終わり、とは言え何かすることが有るでもなく。一体どうしたのかと考えていたときに、マルスさんが帰ってきた。

「…昔馴染みの、というか…一人、手に負えない同僚が王都にいてな。やはり、王都にも何件かそんな話がきているらしい。それでここエクセにもそんな話が集まっているのなら、それを報告しに来い」という手紙が届いたんだ」

そついい、諦めたような顔で溜息を吐くマルスさん。

「…要注意人物である者を王都に招くように書かれていたとは思えませんか？」

「ああ、そこまでは書かれてはいない。居ないが…もし連れて行かなければ、連れて来いと言われるのは明白だからな…」

「それに従うしかない、という関係…ということとは、余程上位の立場の者だと？危機管理に対する認識がゆる過ぎるのでは？」

呆れたようなエリーセさんの表情と声に、マルスさんも反論するでもなく、正にそうだとも言いたげに苦い顔をする。本当にあいつは、あいつの我が侭加減は、など、それを言葉にのせることでその苦い物を外へと吐き出すようにブツブツとつぶやいている。

「まあ、私としては王都へ行けるなら何でもいいわ。情報の集まりやすい地、歴史の残る地であるというなら。調べるにしたところで時間はかかるでしょうし。早くなるに越したことはないわね。望めるのなら、地位のある人物にそれらを調べる自由を約束させて貰いたい、というところかしらね」

「それについては、大丈夫だろう。この相手というのが、それ以上ない程の奴だ」

「それって……この国は大丈夫なの？」

「一人だけ毛色が違ったというか……とはいえ、あいつは三番目だ。余程のことが無い限りは問題ない、とは思っただが……」

相変わらずに難しい話をするマルスさんとエリーセさん。エリーセさんが呆れながらに口を開くと、それに答えるマルスさんが、どんだん歳を取っていくように見える。

そんな時、今まで静かだったマンジおじさんが、難しい問題を出されたようなやや困った顔で、恐る恐るというか、やや自信なさ気な声で、マルスさんへと言葉を向ける。

おおよそでは検討つくんだが、結局それはどんな人物なのか？と盛大な溜息をこれ見よがしに吐き出すと、何かを諦めたような顔のままに

「ネスカ王国第三王子、マクスハイム・オウル・エステシア・ネスカ殿下だ」

其の言葉に、エリーセさんは何かを否定するように首を振り、マンジおじさんは余程衝撃的だったのかそのままで固まり、僕はよく

解らなかったたので首を傾げた。

一夜明け、早朝。マルスさんも仕事関連を昨日の内に問題の無い様終えてきていたために、日の昇る前からの出立ということになった。

王都までは、のんびりとした旅程で向かったとしても五日もあれば辿り着く。強行軍で、早ければ三日の距離らしい。少し大回りになるが、途中にある村を経ても、六日もあれば辿り着けるとマルスさんは言った。

出来るだけ急ぎたいとの意見には、エリーセさんが少し難しい顔をした程度で、誰も文句をいうことなく。真っ直ぐに王都へという旅程となった。

「準備はいいか？」

家を全員が出たのを見たマルスさんが、確認の為に声をあげる。それに頷きや拳手で返すのをみたマルスさんが、それでは行くかという声と共に馬車へと向かう。

其の背を追うように僕も歩き出し、荷物を全て積み終えると昨日まで時間を共にした、短い付き合いであった其の家に

「行つてきます！」

と声を掛け。くるりと振り返ると、差し出されていた手に？まって馬車に乗り込み。

動き始めた其の揺れに、まだ見ぬ街との出会いを思い描いた。

第15話 今は未だ舞台裏の話

この大陸において二大国の一翼となるネスカ王国は、一昔前まで続いたローエム帝国の苛烈なまでの武力による領土拡張への警戒として、其の城壁は勿論、城塞という威容となった王城、さらにはより一層と高く、頑丈に隙なく囲うように王都の外縁に石壁を組むことにより、それを一目見ただけでこれに挑むことの無謀を心に植えつける程の様相を築き上げていた。

その備えは何も建物だけではなく、兵に対しても万全を期するべく。

ローエム帝国の領土拡張も、代わりと共に沈静化し、それに伴いネスカの軍備拡張も停滞から縮小へと移行しつつあるものの、その訓練内容には少しも緩みは存在せず、未だ強国としての存在感を堅持していた。

王城の門扉にて警護する様に直立不動にその日の任に当たっていた一人の青年。ここ最近は何やら不穏な問題が各地で発生しているらしく、様々な地方からの情報を携えた早馬が到着しては王城へと吸い込まれていく光景に、さて今日はどのくらいだろうかとぼんやり考えていた時である。

微かな足音が聞こえて其方へと振り向くと、何時の間にかすぐ側まで近づいたのか、怪しい人影が此方へと歩んでいた。元は茶の口ブであったのか、それは酷く汚れ、所々に元の色を残すのみで、顔を見ようにもすっぱりとローブに覆われた其処に視線を向けても其の表情は伺えない。

一言で言い表すなら、怪しい。

この近辺には王城しか、ない。何処かへ向かう途中に通るような場所でもなく、ならばここに居る理由は王城へ向かっているということになる。しかし、明らかに平民よりも異質な装いの人物に、警戒無く対処出来ようはずはない。

腰に佩いた剣に手を伸ばし、それから誰何の声を向けるべきか。

そう考え手を動かそうとした時、それまでは微かにしか聞こえなかった足音が耳に響いた。

トン

王城の中に在って一際開けた場所であり、数々の案件の集まる場所。人の胴回りよりも太い柱が幾筋も均等に聳え、其の空間の中心には、朱の絨毯が真っ直ぐに伸びる。その朱の道は豪壮な作りの扉から始まり、八段ある広々とした階段を経て、誰彼が座することの無い、一人の主にしか座ること遠敷る去れない威容を誇る椅子の足元まで続いている。

その壇上。この日もまた告げられた報告を受け、其の椅子へと腰

掛け、此れまでに集まる情報を元にそれに対する対処に対する緊急の召集の元、集まる面々へと視線を向ける。

重臣、近場の領主、エクセザ軍軍団長、近衛師団長や各騎士団団長等。

そして、行き成り扉を開け放って現われた、酷く汚れたローブを身にまとい、門衛の背に付き従うというよりは、まるで不可視の糸で操っているかのようにしながらに歩く、怪しい人物へ、と。

周囲は当然のようにざわつき、警戒を表し、途端に殺気走るような喧騒が飛び交う。

そんな中にあっても悠然とした歩みは止まることなく、少し、また少しと歩を進める。

シャリン、と澄んだ音を耳にし、それが鞘走りの音だと気がついた時には、一つの影が動いていた。

それに対し、気にする風もなく歩みを進めるその人物、の前を歩く門衛が

「殺意を抱いている者」

と、すこしくぐもった声を発し、その後ろを歩む人物が、一歩、脚を踏み出した。

トン

と、まるで絨毯の上を歩いているような響きのその足音の後、『ドサリ』と複数の音が周囲で響く。ついで聞こえた奇声に、向けられた視線の先には、喉を押さえて苦悶にのたうつ騎士の面々の姿。

「倒れた者を見、救護の念を抱かなかった者」

更に一步。それだけで、この広い空間は静寂に包まれた。そこでようやく、其の人物は歩みを止めた。

「このような形で突然の訪問、どうぞ御寛恕いただきたい。何分、急を要する次第であり、少しばかり強行な手段をとらせて頂いきました」

と、優雅に一礼し、再びその上体を伸ばす。

「今立っているものは、七名ですか。ああ、国王陛下も入れますれば八名。ここはよい国なのでしょうな」

そう言い、それから一步、足音を響かせた後には、その場は静寂に支配された。

「これよりの会合は全て極秘とさせて頂きたく、この場において国王陛下と私以外のものには、眠っていただきました。此方の都合でございますが、其の点どうかお許しを」

許すも許さないも、対抗する手段が皆無である以上、そしてこれだけのことを片手間に出来るといふ人物を相手に、異の唱えようも無いという思いしか無い。

それでも、其の言動から取れる態度には、王政という物に対する理解があり、其の上で自分よりも王のほうが権威を持っているとした言動を元にされているのが分かる。

ならば、自分に求められているのが何かを知るべく数ある疑問に答えてもらうようにするべきだと思い、心の中に巢食う恐怖をひたすらに押しとどめ、頼む声よ震えてくれるなと願いながらに相対す

るその人物への対応へと思考を切り替えた。

「して、そこまで急ぎで此处まで来た理由とは？」

「はい。それは当然の疑問です。ご存知とは思いますが、ここ最近、身元不明の人物が、各地で見かけられた、という報告が集められていると思いますが、それに関する話で参った次第です」

「そなたに関係する物であるか？」

「はい、私も其の一人にありますれば。ゲーム・マスターの望みは分かりませんが、それに因って集められた内の一人が私ということですよ」

「ゲーム、マスター？」

「ああ、そうですね、どういいますか…この世界において、天上の者に等しいお方の名称はどのように？」

次々に飛び出る其の言葉には、聞き覚えの無い物が含まれ、より一層問題が複雑化していくように思われた。とはいえ、それは自分が理解できない、できていないだけであり、それが解りさえすれば核心に近づくという物であるということだけは理解していた。

「それは…神、ということであろうか？」

天上神、創造主、雲上人、名称は数あれど、其の世界にありて唯一絶対と謳われる存在。

この世界においてはただ”神”と呼ばれているのですね、と呟いた其の人物は、次いで一つ願いを聞いて戴きたい、と告げた。

「神の座す場所、それに纏わる伝承。古に謡われる神歌や民謡等、それに詳しい物やそれに興味を持つ者を紹介頂きたいのですが」

そう言い、言葉を切る。その言葉に、即座に浮かんだ人物を思い描き、頭を抱えたくなる。確かにそれらに纏わる物も集め、其の好奇心から数多くの伝承、またはその情報に対する手掛かりのありそうな場所すらも数多く知っている。其の上で王家にのみ残る歴史の裏事情にも興味を持ち、其の普段は嫌がる自身の立ち位置を余すことなく利用しては其の好奇心のままに歩む一人の人物。

「其の者に害をなすことは無いと約束して貰えるなら」

それまでに滲んでいた恐怖や畏怖が何処へという雰囲気の国王の態度には、ある種の覚悟や決意を孕む、しかし国王という言葉が似つかわしい、堂々としたそれに戻っていた。

「この身に掛けて。其の願いを聞き入れて頂けるならば、私は友誼を持ってこの国に、この国の王に助力致しますよう」

其の言葉にある、この力に対する魅力よりも、先の約束に対する肯定の返答に、国王は安堵の息も漏らす。しかし、次いでもたげた感情は、其の人物が問題を起こさないかどうかという不安だった。とはいえ、ここまで進んだ話に、今更適当な人物が思い起こされることも無く。

「マクスハイム・オウル・エステシア・ネスカ。この国の第三王子にして、我が息子だ」

其の言葉に対する返答は、幾分楽しそうな響きを帯びた声と、定

例句じみた門衛の声による礼の言葉。続いてこの場を辞する言葉を述べると、其の人物は扉へと向けて歩み。

扉を出、その扉が閉まる直前。一度足音を響かせた直後に閉じられた扉の内では、先ほど迄静寂を守っていた者達が、ゆっくりとその空間に活気を戻し始めるように動き出していた。

「誰だ？」

ノックに次いで入室の許可を求める声に、まるで興味も感じられない声を発した部屋の主は、次いで述べられた言葉に機嫌を悪くした。

「マクスハイム・オウル・エステア・ネス力殿下でいらつしやいますか？ 話をしたく参りました」

「そんな長つたらしい名前で呼ぶような奴と話す事などないと常日頃から俺は言っているはずなんだが。他所者か？ お前は。それと俺を殿下と呼ぶな。それが相応しいの兄上達だけだ」

「……ずいぶん面白いお方ですね。わかりました、その言に従いたく。私は何とお呼びすれば話し合いに応じて頂けるのでしょうか？」

「マクスでいい。入室を許可する。入れ」

そうして現われたのは、門衛と、その背後に酷く汚れたローブで

全身を覆う怪しい人物。

しかし、マクスというこの青年は、それを眼にしても微動だにすることなく、難しい顔をしたままに視線を二人に向けたままだった。

「それで、話とはなんだ？ その門衛の男はどうしたんだ？ それと、お前の名は？」

「そうですね。この青年には、此方の言葉を話して頂くために協力して貰っております。ここまでで私の話とはどんなものか予想がつくのでは？ それで名前ですね。私はデパージトリイ。ディーともお呼びいただければ」

「確認する。その門衛を介さず、俺に直接触れることでその男を解放することはできるのか？」

「いやはや、あなたには恐怖という物がないのですか？ 自分で言うのも何ではありますが、見るからに怪しい者に対し、そのような言動は王族の血を引くものとしてはいささか危険に対する認識が緩いと思われませんが」

「上二人の兄が優秀である以上、俺など何時死んでも問題などない。むしろ死んだほうが後顧の憂いも消えよう。それなら好きに生きるだけだ。ディー、お前が此処に来たのも父王に会った後なのだろう？ ならば父王がそれを望んで現われたと考えてもいい。まあ話し合いということらしいが」

「…興味深いというか、ええ私はあなたのような方は好きですね。それで、この青年の解放を所望ということでしたね。解りました、その言に従いましょう」

その言葉の後、扉を開け外に出る。そうして戻ってきたときには、そこには一人の人物、デイーだけとなっていた。デイーが近寄るのを動じることなく見たままに、目の前でそつと跪き、右手を差し出されるのを見、それに数瞬考えるような視線をくれた後に、マクスはその手に自分の手を重ねた。

「マクス様には威風がお在りですね。よき跡継ぎに恵まれた国となれば、国民もまた幸せでしょう」

「俺が跡を？ それは無い。兄上達の方が断然相応しい。それで？ そんな話をしたいのか？ それならもう用はない」

マクスの言葉に、返された言葉は先程のそれ。この世界において残されている、神の座す場所、それに纏わる伝承。古に謡われる神歌や民謡、その上でこの世界の歴史と、王族にのみ秘された伝承。それを聞いたマクスの表情には、どこか納得したような表情が浮かんでいた。

「それで俺の元に、か。そうだな、条件がある。ただで教えられる物じゃないのでな。どうもお前は今回の騒動について色々詳しいみたいだな。それを教える。嫌ならそれでいい。自分で探るまでだ」

「成程、提供ではなく交換でなければこの話は無し、と？ 私としてはそれで構いませんよ」

「そうか。ならこちらが話すのは先程聞いた事だな。ならお前にはこの問題の要点、神について知っていることを全て話してもらう」

「...どうしてそこがこの騒動の要点と？」

「流れで解るだろ？ それともそんな事に気がつかない奴に見えたか？ それで、知っているのか？」

「…知ってはいます。とはいえ、この世界とは別の、と付きませんがしかし、これは唯人が知っていていいものでもない……何故それを知ろうと？」

「好奇心だ。それ以外はない」

解りやすいというか。そんな苦笑に似た響きに、しかし反応は何も無い。それはそんな反応をどうでもいいというよりは、むしろ慣れてしまったというだけの理由ではあるが。

「ではこうしましょうか。あなたの元を集まるプレイヤーの数に応じ、その都度それらの情報を開示しましょう。此度の騒動にどれ程集められたかは解りませんが、そのもの達の中には元の場所へと願う者も居るでしょう。そうになると、過去に同じことがあったのか、そして在ったとしてその後どうなったのかと考える者が現われるでしょう。そしてその情報が一番集まる場所と考えたとき、目指すべき場所の一つがこの王城でしょう」

「プレイヤー？ 何だそれは？ この世界に現われた者の呼び名か？ まあいい、それが条件だな？ それは自身の勢力として引き込めということか？」

「大雑把にはその解釈でよろしいでしょう。私としても、自分の足で探すべきなのですが、この世界は中々に広い。未だ未開の地も在るとなれば、耳目、手足は多いに越したことは無いということですか」

「そういうことか。俺の元にその為の行動をしている者の情報が集まるようにしたい、と」

そのための協力も惜しまない、というデューの言葉に、マクスは了承の言葉と共に頷いた。その後、ならば即座に此れまでの問題に対し、未だ対処のされていない数件の問題を自分の下へと届けられるように、また今後同類の問題の届け先も自分の下へ届けるようにと手配に動く。

そうして集めた各地の報告書類の中、エクセで保護という名で三人の人物を預かっているという人物の名を眼にし、マクスは急ぎ筆を執ると、書き終えたそれを大至急で届けろと言い渡し、さて久しぶりの再会となるが、あいつがこの話を聞くとどんな顔をするだろうか？ と、それを考えて笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1814q/>

一人の少年の物語

2011年6月12日05時09分発行